

三重県鈴鹿市

南山遺跡・南山6号墳

1991

鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市遺跡調査会

序

三重県の北勢地方南部に位置する鈴鹿市は、西に鈴鹿山脈が横たわり、東に肥沃な沖積平野の広がるみどり豊かな田園都市です。近年は市内の国際レーシングコース等を中心とした各種イベントの開催によって国際的な文化交流が盛んになり、それに伴って、郷土の歴史や文化遺産に対する関心はますます高まりつつあります。

当市には、国史跡伊勢国分寺跡、広瀬の長者屋敷遺跡をはじめとした先人の足跡が随所に残され、その数は約千か所にもものぼります。

さて、これらの遺跡のなかには、各種の土木工事によってやむをえず姿を消すものも少なくありません。こうした開発行為に際しては文化財保護法の主旨に則り保存に努めるとともに、余儀なく消滅するものについては事前に発掘調査を行ない記録保存を図ることとされています。

今回報告いたします南山遺跡・南山6号墳もそのひとつで、鈴鹿市クリーンセンターの進入道路の建設に伴い発掘調査を実施しました。6号墳からは鈴鹿川流域では検出例の乏しい横穴式石室が検出され、土器や鉄製品などの副葬品が数多く出土しました。また、その下層からは弥生時代後期の墳丘墓の一部と考えられる遺溝が検出されるなど興味深い成果が得られました。本書が文化財保護の啓発ならびに学術的な研究の一助となれば幸いです。

末筆になりましたが日頃より御指導を賜っております文化庁、三重県教育委員会文化振興課、同埋蔵文化財センター、鈴鹿市文化財調査会の各位に厚く御礼申し上げます。

平成3年5月31日

鈴鹿市教育委員会

教育長 市川 年夫

例 言

1. 本書は鈴鹿市クリーンセンター進入道路新設工事に伴い発掘調査を実施した三重県鈴鹿市上野町字東谷山所在の南山遺跡・南山6号墳の報告書である。
2. 調査は鈴鹿市遺跡調査会が主体となり、社会教育課(当時)中森成行・新田剛が担当した。
3. 本書の編集・執筆は中森成行の監修のもと、浅尾悟・藤原秀樹の指導を得ながら新田剛が行った。
4. 出土遺物の実測・トレースは新田剛・田中智子が行った。
5. 遺物実測の縮尺は弥生時代の土器が3分の1、石器が2分の1、土師器・須恵器が4分の1、鉄製品が2分の1である。
6. 本書に用いた方位でM.N.は磁北を示す。
7. 石器の石材の肉眼鑑定は三重県立津西高等学校教諭磯部克氏にお願いした。
8. 調査ならびに報告書作成に際し下記の皆様及び関係機関から御指導・御助言を賜りました。記して感謝申し上げます。(敬称略)
伊藤洋・大場範久・小笠原好彦・岡田登・鈴木重治・仲見秀雄・八賀晋・村山邦彦・吉田義隆・三重県教育委員会・亀山市教育委員会・四日市市教育委員会・鈴鹿市文化財調査会
9. 出土遺物は鈴鹿市教育委員会で保管している。

目 次

I. 前言	1
II. 位豊と歴史的環境	2
III. 南山遺跡一古墳築造以前(弥生時代)の遺構と遺物	9
1. 遺構(SX1)	9
2. SX1出土の遺物	9
3. その他の遺物	14
IV. 南山6号墳	18
1. 調査前の墳丘	18
2. 埋葬主体部	18
3. 埋葬主体部の遺物	18
4. 盛土と周溝	18
5. その他の遺物	26
6. 埋葬主体部の遺物	26
V. まとめ	30

挿図目次

第 1 図	位置図 (1:50,000)·····	3
第 2 図	地形図 (1:5,000)·····	5
第 3 図	地形図 (1:500)·····	6
第 4 図	弥生時代の遺構 (1:100)·····	10
第 5 図	弥生時代の土器 (1)SX1 出土 (1:3)·····	12
第 6 図	弥生時代の土器 (2)SX1 出土 (1:3)·····	13
第 7 図	弥生時代の土器 (3)(1:3)·····	16
第 8 図	弥生時代の石器 (1:2)·····	16
第 9 図	調査前測量図 (1:100)·····	19
第 10 図	埋葬主体部実測図 (1:40)·····	20
第 11 図	埋葬主体部遺物分布図 (1:20)·····	21・22
第 12 図	埋葬主体部の土器 (1)(1:4)·····	24
第 13 図	埋葬主体部の土器 (2)(1:4)·····	25
第 14 図	埋葬主体部の鉄製品 (1:2)·····	25
第 15 図	調査後測量図 (1:100)·····	27
第 16 図	盛土断面図 (1:100)·····	28
第 17 図	その他の土器 (1:4)·····	28

表目次

第 1 表	出土遺物一覧·····	33
-------	-------------	----

写真図版目次

- 写真図版 1 調査前全景 / 表土除去後全景 / 作業風景 (1) ~ (2) / 主体部 / 土層断面 A
— B / 土層断面 C-D
- 写真図版 2 調査後全景 / 遺物出土状況 (1) ~ (7)
- 写真図版 3 南山遺跡出土の遺物 (1)
- 写真図版 4 南山遺跡出土の遺物 (2)
- 写真図版 5 南山 6 号墳出土の遺物 (1)
- 写真図版 6 南山 6 号墳出土の遺物 (2)

I . 前 言

鈴鹿市上野町所在のし尿処理施設「鈴鹿市クリーンセンター」及びその進入道路の建設に際し、清掃施設建設事務所から埋蔵文化財分布調査の依頼があった。分布調査の結果、建設予定地内には舟塚古墳、南山古墳群をはじめ、先土器時代の遺物が表面採集されたといわれる南山遺跡、玉造遺物が表面採集された一反通遺跡があることが判り、遺跡の保存について協議を行なった。舟塚古墳については、当施設の付属施設として整備される公園の一部に取り込む形で保存・活用されることになった。しかし、南山6号墳・南山遺跡、一反通遺跡の3遺跡については工事設計上破壊は免れないとのことであった。そこで、昭和62年度に南山6号墳及び南山遺跡、昭和63年度に一反通遺跡の発掘調査を行い記録保存を図ることとした。昭和62年5月、南山6号墳及び南山遺跡の調査にあたり、鈴鹿市教育委員会内に鈴鹿市遺跡調査会を設け、調査を開始した。昭和62年5月11日から同年6月30日まで南山6号墳の発掘調査を実施した。これと並行して、遺物・遺構の埋蔵及び遺跡の範囲が不明な南山遺跡については、約250㎡の工事範囲内に限って試掘調査を行なった。建設予定道路の中央線に沿って3m×3mの試掘坑を3か所設定したが、遺物・遺構ともに全く検出されなかった。

Ⅱ. 位置と歴史的環境

1. 位置

鈴鹿山系に源を発する鈴鹿川は安楽川などの支流を合わせながら、鈴鹿市域をほぼ東西に横切り伊勢湾へと注ぎこんでいる。その左岸、広瀬町から石薬師町を経て木田町にかけては、北西部に広がる高位段丘を削り、見晴らしの良い台地を形成している。一方、右岸には后背低地が広がり、その南は国府町から神戸付近へと続く低・中位段丘となっている。

これら鈴鹿川両岸に発達する段丘は、中ノ川流域、岸岡山丘陵とならんで、当市における古墳密集地域である。今回調査を行った南山古墳群は、鈴鹿川中流域左岸、その小支流我入坊川によって形成された浸食谷を見下ろす最高 35m の段丘上に位置する。この台地からは鈴鹿川を挟んで、対岸の甲斐町や野辺町などの集落を眺望することができる。

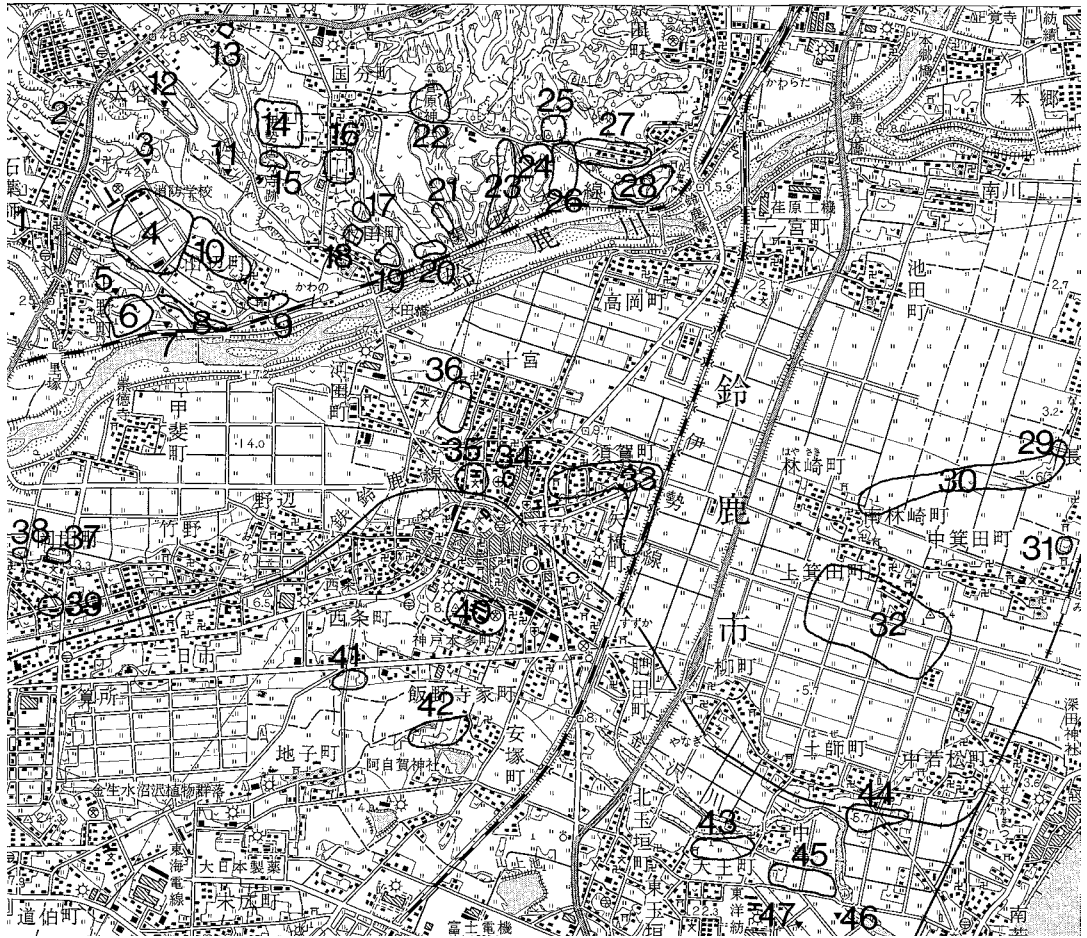
2. 歴史的環境

鈴鹿川中下流域を中心とする地域の歴史は先土器時代まで遡ることができる。左岸では茶山遺跡 (28)、西ノ岡 A 遺跡 (24)、北植松遺跡 (13) などナイフ形石器を中心に先土器時代の遺物が発見されている。とくに西ノ岡 A 遺跡では 20 点ものナイフ形石器が表面採集されており、北勢地方では比較的大規模な遺跡と云える (1)。右岸では国府町西ノ野遺跡などでチャート製のスクレイパーが表採されている (2)。鈴鹿川左岸は稲生町の中・低位段丘と併せて北勢地方随一の先土器時代遺跡密集地域と云えるが、遺跡の分布状況の把握は地元研究者の精力的な踏査によるところが大きい。

縄紋時代草創期から早期にかけての遺物として位置づけられる有茎尖頭器は国分町境谷遺跡、添遺跡 (10)、加佐登町などで発見されている (3)。縄紋早期では鈴鹿川上流域の亀山市太岡寺町大鼻遺跡 (4) や御幣川と八島川に挟まれた東庄内 A 遺跡 (5) などがあるが、中下流域では確認されていない。中期以降になると国府町北一色遺跡と起 A 遺跡 (42) が発掘調査されている。北一色遺跡では中期から後期にかけての竪穴住居が検出されているほか、晩期の合口甕棺墓が検出され (6)、起 A 遺跡では中期の土器が数個体一括出土している (7)。鈴鹿川流域からは逸れるが郡山町西川遺跡では中期の竪穴が 2 棟検出され中期末葉の良好な資料が得られている (8)。その他縄紋時代の遺物散布地は数多く知られるが (9) 比較的小規模な遺跡が多い。

弥生時代になると海岸部に近い旧河川の自然堤防上に遺跡が残されるようになる。狩猟縄紋土器の発見を契機に調査の行われた上箕田遺跡 (32) では弥生時代前期中段階から後期までの遺物が出土し (10) 伊勢湾西岸における弥生時代の基準資料となっている。その他に大木ノ輪遺跡 (30)(11) や天ノ宮遺跡 (29)(12) で前期の土器が検出されている。

中期以降になると遺跡数は増大し鈴鹿川中下流域左岸の高位段丘上や御幣川流域など鈴鹿山脈山麓付近まで分布を広げる。東庄内 B 遺跡では中期中葉の方形周溝墓が検出されている (13)。鈴鹿川左岸では一反通遺跡 (6)(14)、添遺跡 (10)、中尾山遺跡 (21)、扇広遺跡 (25)



第1図 周辺の主な遺跡 縮尺5万分の1

1. 南町古墳 2. 北町古墳 3. 乗鞍山古墳 4. 石薬師東・丸山古墳群 5. 若宮古墳
6. 一反通遺跡 7. 舟塚古墳 8. 南山遺跡・古墳群 9. 山辺古墳群・横穴墓
10. 添遺跡・中山古墳群 11. 蛸田古墳 12. 大谷古墳 13. 北植松遺跡
14. 伊勢国分寺跡 15. 狐塚古墳群 16. 尼寺跡推定地 17. 大鹿山古墳群
18. 木田城跡 19. 磐城山古墳群 20. 沖ノ坂古墳群 21. 中尾山遺跡
22. 富士山古墳群 23. 寺田山古墳群 24. 西ノ岡A遺跡 25. 扇広遺跡
26. 東ノ岡遺跡 27. 青谷遺跡 28. 茶山遺跡・高岡山古墳群・高岡城跡 29. 天ノ宮遺跡
30. 大木ノ輪遺跡 31. 神大寺遺跡 32. 上箕田遺跡 33. 須賀遺跡
34. 萱町遺跡 35. 神戸中学校遺跡 36. 宮ノ前遺跡 37. 岡田遺跡
38. 天神遺跡 39. 岡田古墳群 40. 本多町遺跡・神戸城跡 41. 沢城跡
42. 起A遺跡 43. 深田遺跡 44. 土師南方遺跡 45. 双ツ塚遺跡 46. 塚越1号墳
47. 塚越3号墳

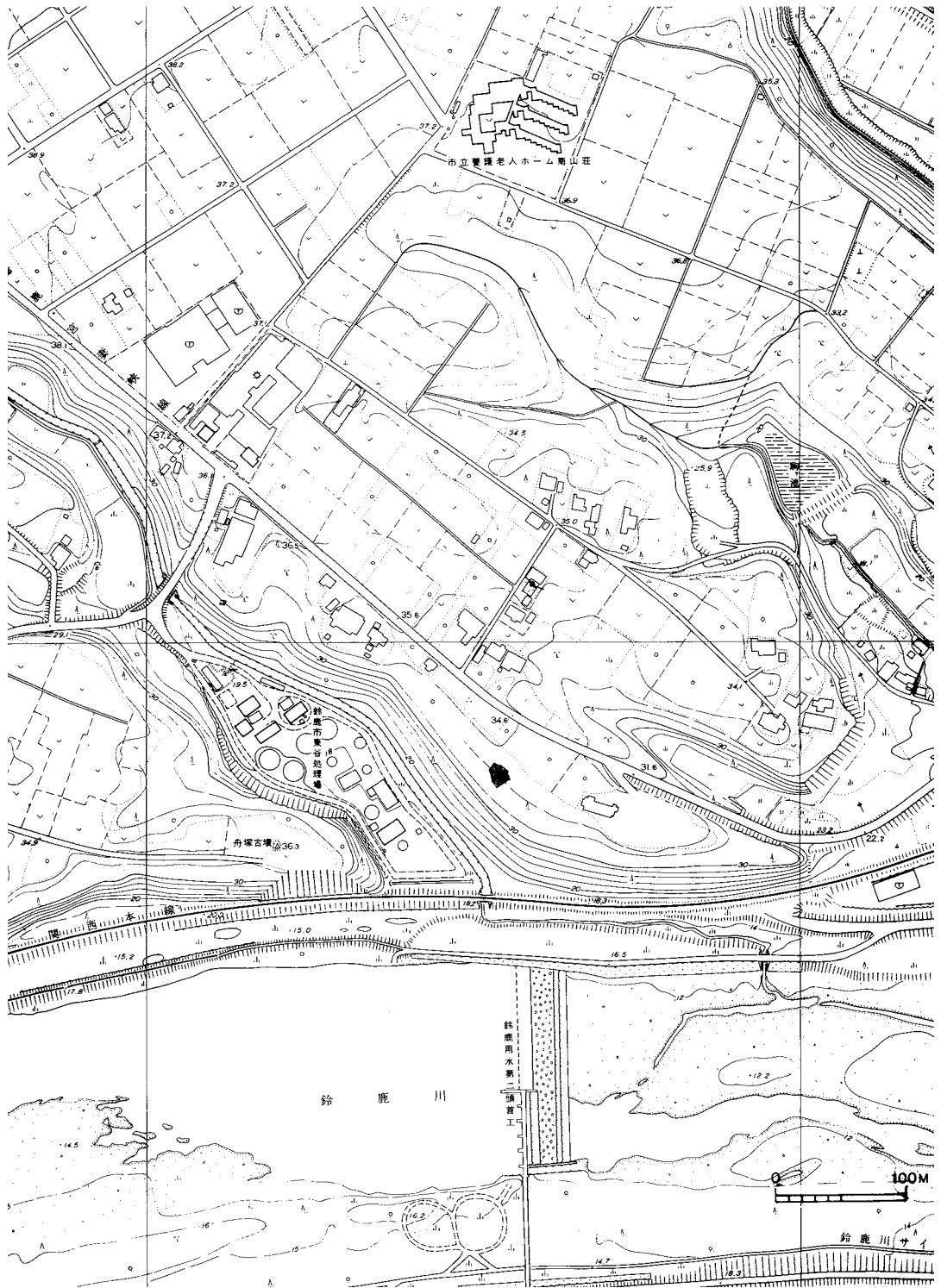
などがあり、尾根ごとに遺跡が分布するといっても過言ではない。最近の発掘調査によって中尾山遺跡は中期中葉から後葉にかけて、扇広遺跡は中期後葉から後期初頭にかけての集落跡であることがわかっている(15)。また、高岡山丘陵の西にもかつて東ノ岡遺跡(26)や青谷遺跡(27)、白子野遺跡などが存在し、ほとんどが調査のなされぬまま土採りなどにより消滅してしまったなかで、東ノ岡遺跡において菱環鈕式銅鐸の破片が採集されている(16)ことは注目される。ちなみに、一反通遺跡では突線鈕式銅鐸の鱗部分が出土している(17)。鈴鹿川右岸及び海岸よりの平野部では上箕田遺跡、須賀遺跡(33)(18)をはじめ岡田遺跡(37)(19)でも中期の土器がみつまっている。

一方、中期後葉の近江系土器を有する遺跡の分布も見逃せない。起A遺跡(42)(20)、深田遺跡(43)(21)はともに金沢川右岸に位置し、近江系と云われる受口状口縁の甕形土器が出土している。とりわけ起A遺跡のSB5一括土器群は近江系住民の所産として積極的に評価されており、近江系土器群の分布の社会的背景に関する考察は興味深い(22)。こうした近江系の土器群は上箕田遺跡や大木ノ輪遺跡(23)のように後期以降にも引き継がれていくようである。

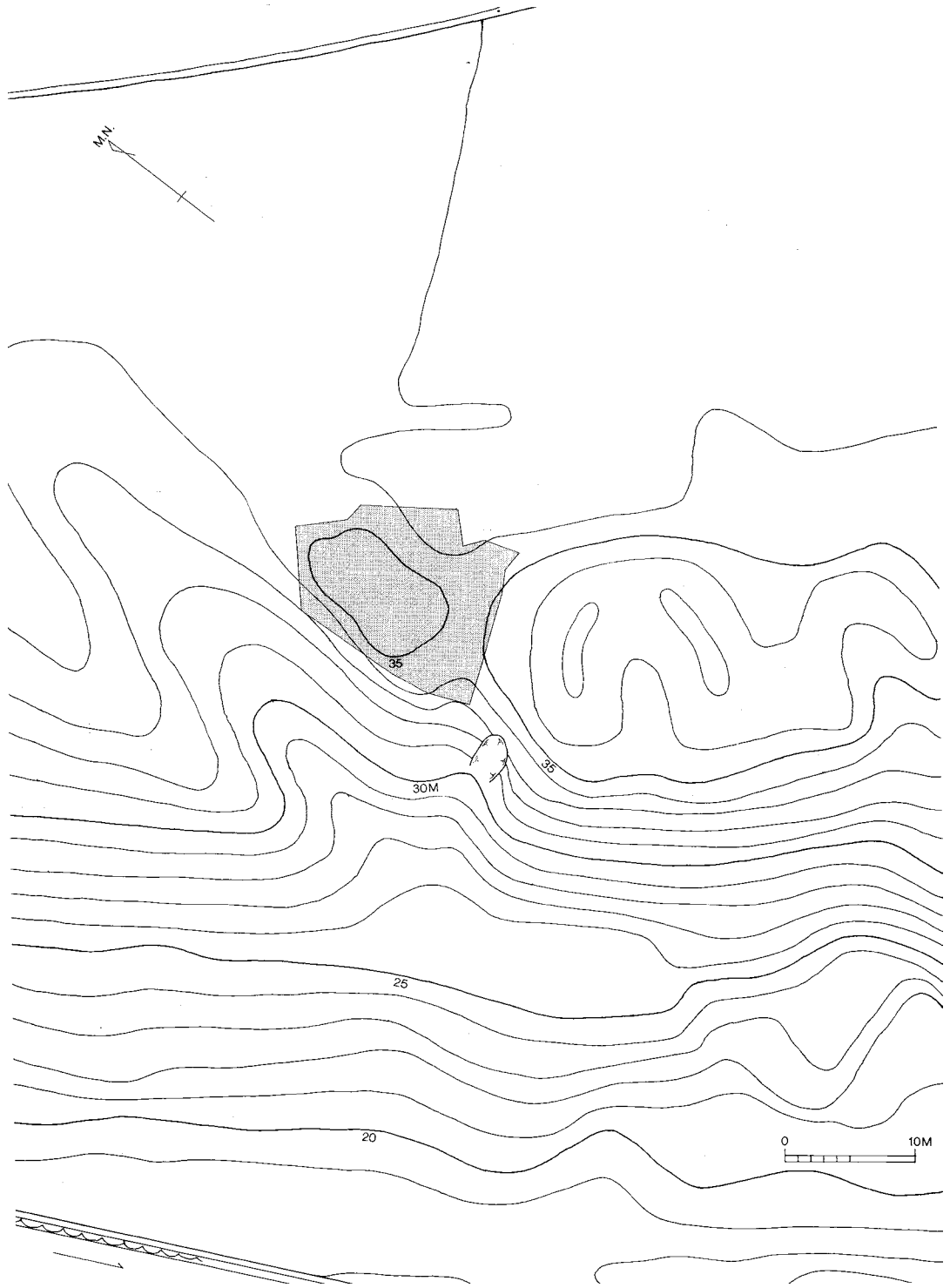
中期以降の遺跡の立地の多用性は後期に関しても同様である。一反通遺跡や青谷遺跡(24)のように高位段丘に位置するものもあれば、神戸中学校遺跡(35)(25)、萱町遺跡(34)(26)、上箕田遺跡、土師南方遺跡(44)(27)、双ツ塚遺跡(45)(28)など低位段丘や自然堤防上に立地するものもある。ただし、市内では今のところ良好な後期集落跡の発掘調査例がなく、土器の一括資料もしいてあげるならば上箕田があげられるのみであり、今後の資料の蓄積が望まれる。

鈴鹿地方は安濃川流域、松阪地方、雲出川流域と並び伊勢国における古墳の密集地域である。当地方の弥生時代における豊かな経済力は古墳時代にもひきつがれ、交通の要衝という地理的条件もあいまっていち早く古墳文化が導入された。

鈴鹿川流域では初元的な古墳として能褒野王塚古墳、上椎ノ木1号墳(29)、愛宕山1号墳(30)など鈴鹿川中流域を中心に分布するものと、寺田山1号墳(23)、富士山1号墳(22)(31)など、より下流に分布する一群がある。前者において後続する古墳には西ノ野5号墳、城山古墳、西ノ野1号墳、井尻古墳、井田川茶白山古墳(32)などがあり、系統的な首長層の存続が考えられている(33)。この地域では横穴式石室の導入も比較的早く井田川茶白山古墳をはじめとして、正知浦1・2号墳(34)、保子里18号墳(35)が続く。一方、石薬師から国分町、高岡町にかけての地域では寺田山1号墳以後系列的な発展がみられないと云われるが、消滅墳が多くしかも調査例に乏しいなど不明な点が多い。横穴式石室を有する古墳では南町古墳(1)(37)、大谷古墳(12)(38)、蛸田古墳(11)(39)が知られている。南山6号墳は市内の横穴式石室をもつ古墳では4例目の調査例であるが、下流域では最初の調査となった。当地域は新羅系須恵器の出土が伝えられ(40)、また、山辺横穴墓(9)(41)の存在など個性的な地域であるとも云える。



第2図 地形図 (1:5,000)



第3図 地形図 (1:500)

その他鈴鹿市内で横穴式石室をもつ古墳には北野古墳(42)、深溝狐塚古墳(43)、双児塚1・3号墳(44)があり、その分布はいずれも鈴鹿川流域及び支流を中心とした地域に限られる。

奈良時代以降の遺跡で見逃せないのは伊勢国分寺跡(14)(16)(45)と長者屋敷遺跡(46)であるが、それぞれ古墳密集地域内ないし隣接に位置しており、国分寺の瓦生産に関連すると云われる川原井瓦窯跡はその中間に位置する。中世城館では遺構の遺存が良好な木田城跡(18)と高岡城跡(28)があり戦略的にも重要な地域であったことが窺える。

〔註〕

- (1) 岡田登(1990)「北勢地方の旧石器時代遺跡」『四日市市史研究』第3号
- (2) 大場範久(1980)「第一章 郷土のあけぼの」『鈴鹿市史』第1巻
- (3)(1)(2)に同じ
- (4) 梅澤裕・山田猛(1987)『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ大鼻(二～三次)・山城(三次)遺跡』(三重県教育委員会)
- (5) 小玉道明・谷本鋭次・山沢義貴(1970)「東庄内A遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会)
- (6) 真田幸成(1968)『北一色遺跡発掘調査概要報告』、大場範久(1980)「第一章 郷土のあけぼの」『鈴鹿市史』第1巻
- (7) 山下雅春(1983)「起A遺跡」『昭和57年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』
- (8) 中森成行(1983)「西川遺跡」『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』(鈴鹿市遺跡調査会)
- (9) 真田幸成(1961)「鈴鹿市の縄文文化遺跡」『神戸史談』第2号(神戸高等学校)
- (10) 仲見秀雄他(1961)『上箕田弥生式遺跡第一次調査報告』 大場範久・真田幸成・仲見秀雄(1970)『上箕田弥生式遺跡第二次調査報告』(鈴鹿市教育委員会)
- (11) 早川裕巳(1980)「大木ノ輪遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』
- (12) 増田安生(1981)「天ノ宮遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』
- (13) 小玉道明・谷本鋭次・山沢義貴(1970)「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会)
- (14) 岡田登(1980)「三重県鈴鹿市北部丘陵採集の玉作り遺物」『古代文化』32-7
- (15) 中尾山遺跡1989・1990年度調査未報告 扇広遺跡1990年度調査未報告
- (16) 岡田登(1990)『鈴鹿市高岡山遺跡群発見の銅鐸片』(『考古学雑誌』第75巻第4号)
- (17)1988年度調査未報告
- (18) 仲見秀雄他(1968)「鈴鹿市須賀の弥生式土器」『神戸史談』第7号
- (19)1989・1990年度調査未報告
- (20)(7)に同じ
- (21) 早川裕巳(1979)「深田遺跡」『昭和53年度県営ほ場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』
- (22) 岩崎直也(1989)「邪馬台国出現前夜の近江一弥生土器から一」『滋賀考古』創刊号

- (23) 中森成行 (1986) 『市道鈴鹿楠線改良工事に伴う埋蔵文化財調査概要報告一大木ノ輪遺跡』(鈴鹿市遺跡調査会)
- (24) 大場範久・仲見秀雄 (1972) 「鈴鹿市高岡青谷遺跡調査報告」『神戸史談』第 8 号
- (25) 浅尾悟 (1989) 『神戸中学校遺跡について』
- (26)(2) に同じ
- (27) 谷本鋭次 (1973) 「土師南方遺跡」『昭和 47 年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会)
- (28) 三重県教育委員会 (1979) 「双ツ塚遺跡」『三重県埋蔵文化財年報』9
- (29) 駒田利治・浅尾悟他「上椎ノ木古墳・上椎ノ木館跡」『一般国道 1 号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要』VI (三重県埋蔵文化財センター)
- (30) 井口敬一・倉田直純・小田泰正・村田照久 (1975) 「鈴鹿・亀山地域調査報告」『ふびと』32(三重大学歴史研究会)
- (31) 大場範久 (1980) 「第二章 古墳時代」『鈴鹿市史』第 1 巻
- (32) 小玉道明 (1988) 『井田川茶白山古墳』(三重県教育委員会)
- (33) 和田年弥 (1974) 「古墳文化の地域的構造とその特質一伊勢国鈴鹿地方の場合一」『古代学研究』72
- (34) 駒田利治・浅尾悟 (1988) 『一般国道 1 号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要』IV
- (35) 真田幸成・仲見秀雄 (1964) 「保子里 18 号墳発掘調査報告」『神戸史談』第 4 号
- (36) 鈴鹿市教育委員会 (1987) 『鈴鹿市遺跡地図』
- (37)(31) に同じ東京国立博物館 (1988) 『東京国立博物館図版目録古墳遺物篇 (近畿 1)』東京美術
- (38)(31) に同じ真田幸成 (1963) 『鈴鹿市出土須恵器集成』
- (39) 1988 年度調査未報告
- (40) 浅尾悟 (1987) 「資料紹介神戸中学校所蔵、新羅系土器について」『国一バイパスだより』15 号 (三重県教育委員会)
- (41) 仲見秀雄 (1953) 「鈴鹿郡山辺横穴調査記」『三重郷土会誌』30 仲見秀雄 (1980) 「第三章 奈良時代」『鈴鹿市史』第 1 巻
- (42) 大場範久 (1978) 「北野古墳」『三重用加水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』
- (43) 大場範久・仲見秀雄 (1972) 「鈴鹿市深溝狐塚古墳査報告」『神戸史談』第 8 号
- (44)(31) に同じ
- (45) 藤原秀樹・新田剛 (1990) 『伊勢国分寺跡一第二次発掘調査概要一』(鈴鹿市教育委員会) 浅尾悟 (1991) 『同一第三次発掘調査概要一』(同)
- (46) 藤岡謙二郎・西村睦男 (1957) 「歴史地理的にみた鈴鹿市広瀬台地の初期歴史時代遺跡」『史蹟と美術』279

Ⅲ．南山遺跡—古墳築造以前(弥生時代)の遺構と遺物

1. 遺構(SX1)

調査当初から古墳盛土中より弥生時代の土器片が多数出土していたため主体部調査のち墳丘を断ち割ったところ、墳丘下に弥生時代の遺構があることが判った。そこで、墳丘をすべて除去し、黄褐色土(地山)上面にて遺構検出を行った。

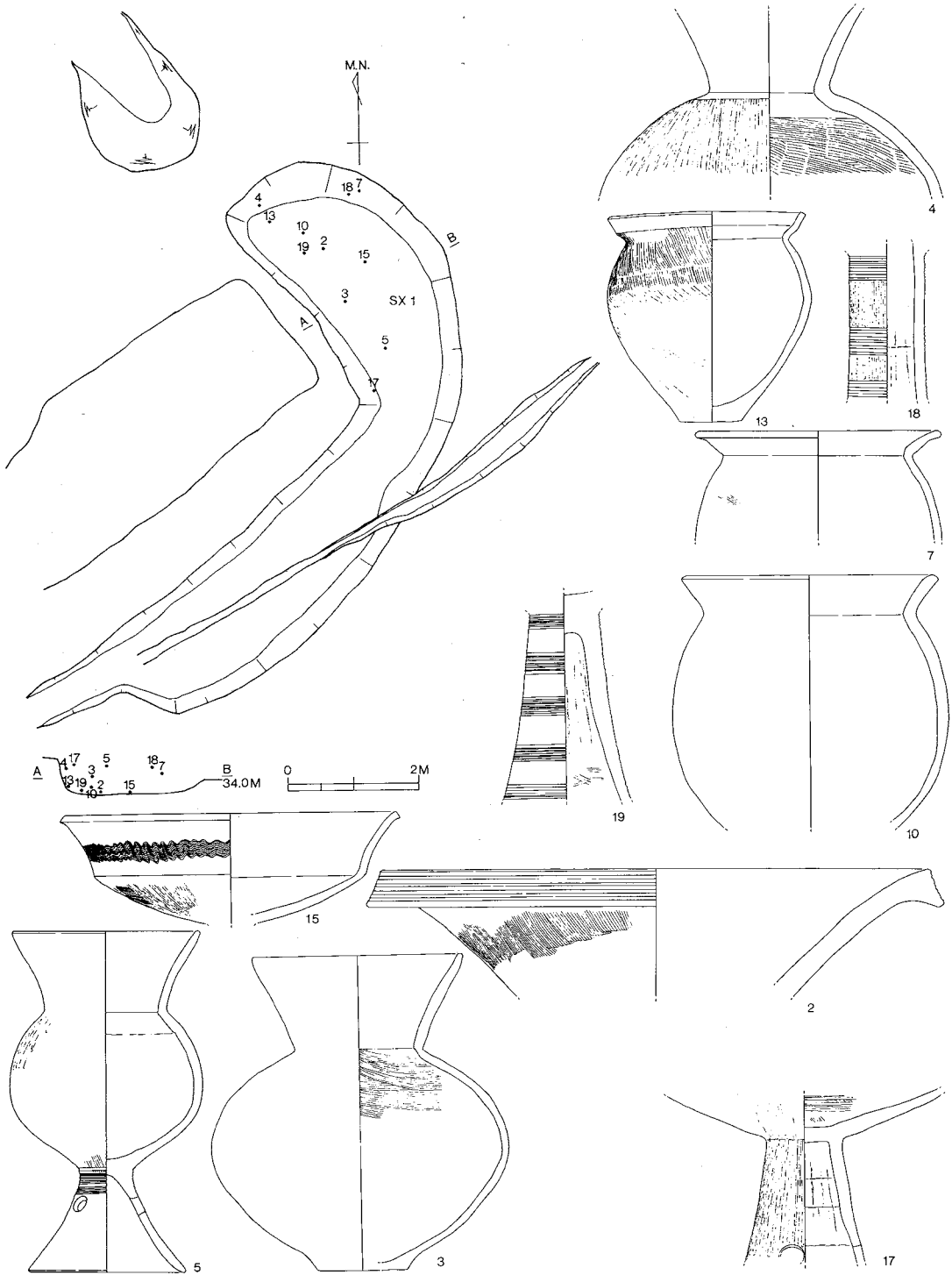
SX1(第4図)当遺跡で検出された弥生時代唯一の遺構である。L字状に曲がる溝様のもので、とくにL字内角側のうわばが描く平面形は整ったL字状をなし、横断面も急角度となっている。検出面の幅は3.0~4.5m、深さは約0.1mである。南西端は台地の縁辺にあって途切れている。埋土からは北西部分を中心に弥生時代後期の土器が出土している。

なお、溝北西端から北西へ約1mの地点にある落ち込みは締まりのない黒色腐植土の埋土を有するため、後世の掩乱であると判断した。

2. SX1出土の遺物(第6~7図)

壺形土器A(第5図1~2)広口壺形土器である。1は口縁部のみの破片で口縁部を約9分の1残し、推定口径は16.8cmである。赤褐色を呈する。胎土・焼成ともに良好で、径0.5~2.0mmの白色砂礫を混入する。外反する頸部に垂下口縁のつくものである。口縁端部は肥厚し、角張る。口縁内面はクシ状工具による刺突羽状紋、外面にはクシ描き波状紋が施されるが、風化のため判然としない。2は頸部以上を約4分の3残し、口径33.4cmである。赤褐色を呈する。焼成はやや甘く胎土には径0.5~4.0mmの白色砂礫を多く含む。5対の補修孔を有する。外反する頸部は口縁部にあってやや垂下しながら肥厚する。頸部外面は縦方向のハケ目調整がなされ口縁端部には6条のクシ描き直線紋が施される。風化が著しい。

壺形土器B(第5図3~5)直線的に外反する頸部を有する。3は胴部を約2分の1、底部を4分の3欠損する。口径12.8cm、推定底径5.6cm、高さ19.3cmである。黄褐色ないしやや赤みを帯びた黄褐色を呈する。底部付近に黒斑を有する。胎土・焼成ともに良好。胴部は緩やかに膨らみや潰れた球形をなす。頸部は直線的に外反し、口縁部はわずかに内湾しながら丸く納まる。胴部中程にて最大径28.0cmを測る。胴部内面上半には横方向のハケ目調整が施されるが、その他の調整は風化のためはっきりしない。4は口縁端部および胴部下半を欠損する。赤褐色を呈する。胴部内面は横方向のハケ目調整、外面は縦方向のヘラミガキが施され、頸部から上は内外面ともにヨコナデが施される。5は脚台をもつ壺形土器で口縁部、脚部を約2分の1残し、胴部を一部欠損する。推定口径11.4cm、推定底径9.6cmで高さ21.0cmである。黄褐色を呈する。焼成・胎土は良好で径1mm前後の白色砂粒を混入する。頸部は直線的に開き口縁部はわずかに内湾する。脚部はやや外反ぎみに開く。胴部中央より下位において膨らみ最大径となる。外面は胴部と脚部の継ぎ目付近にハケ目調整がみられるが、ほかは縦方向にヘラミガキされている。脚部には3方に円孔

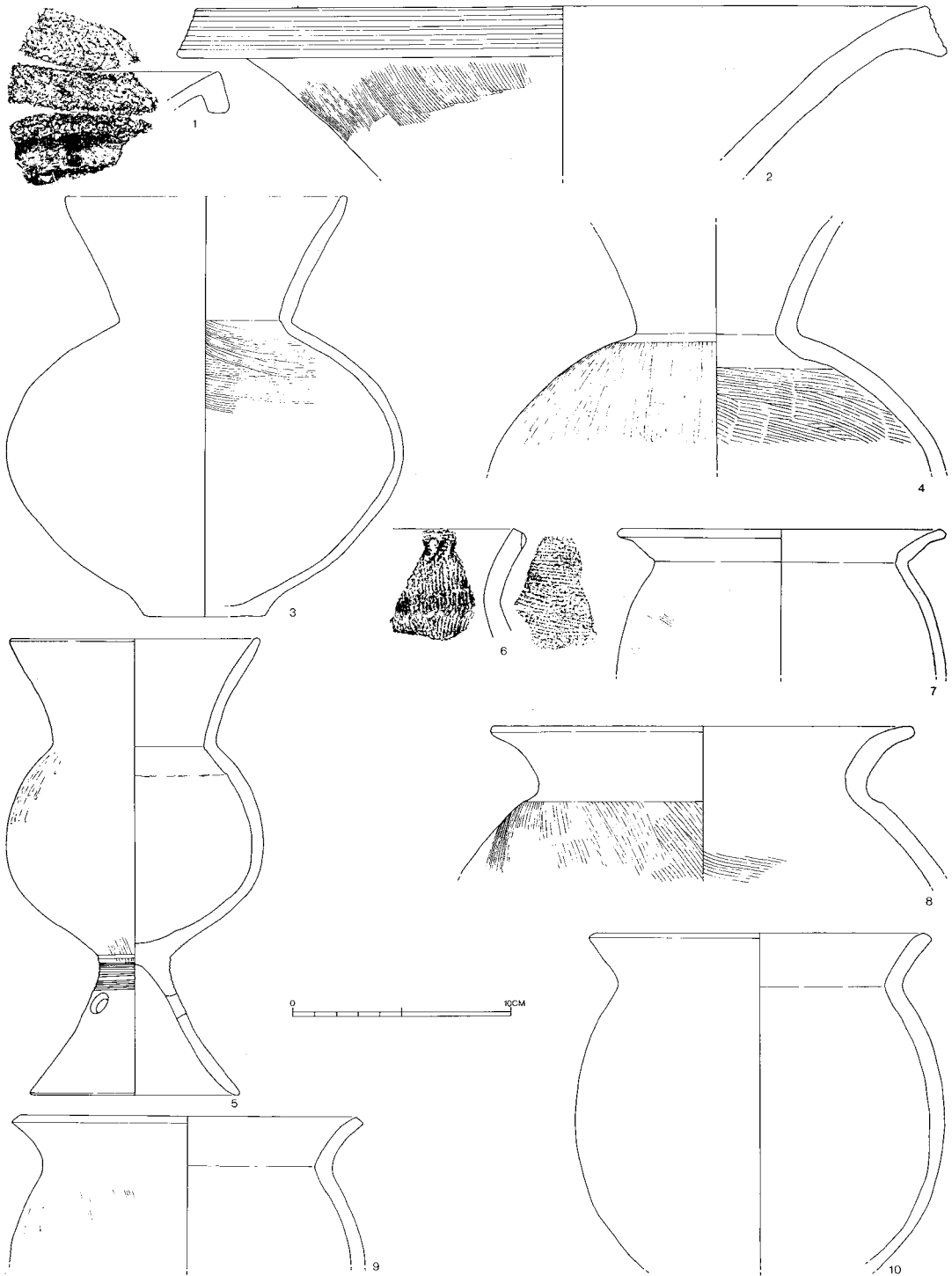


第4図 弥生時代の遺構 (1:100)

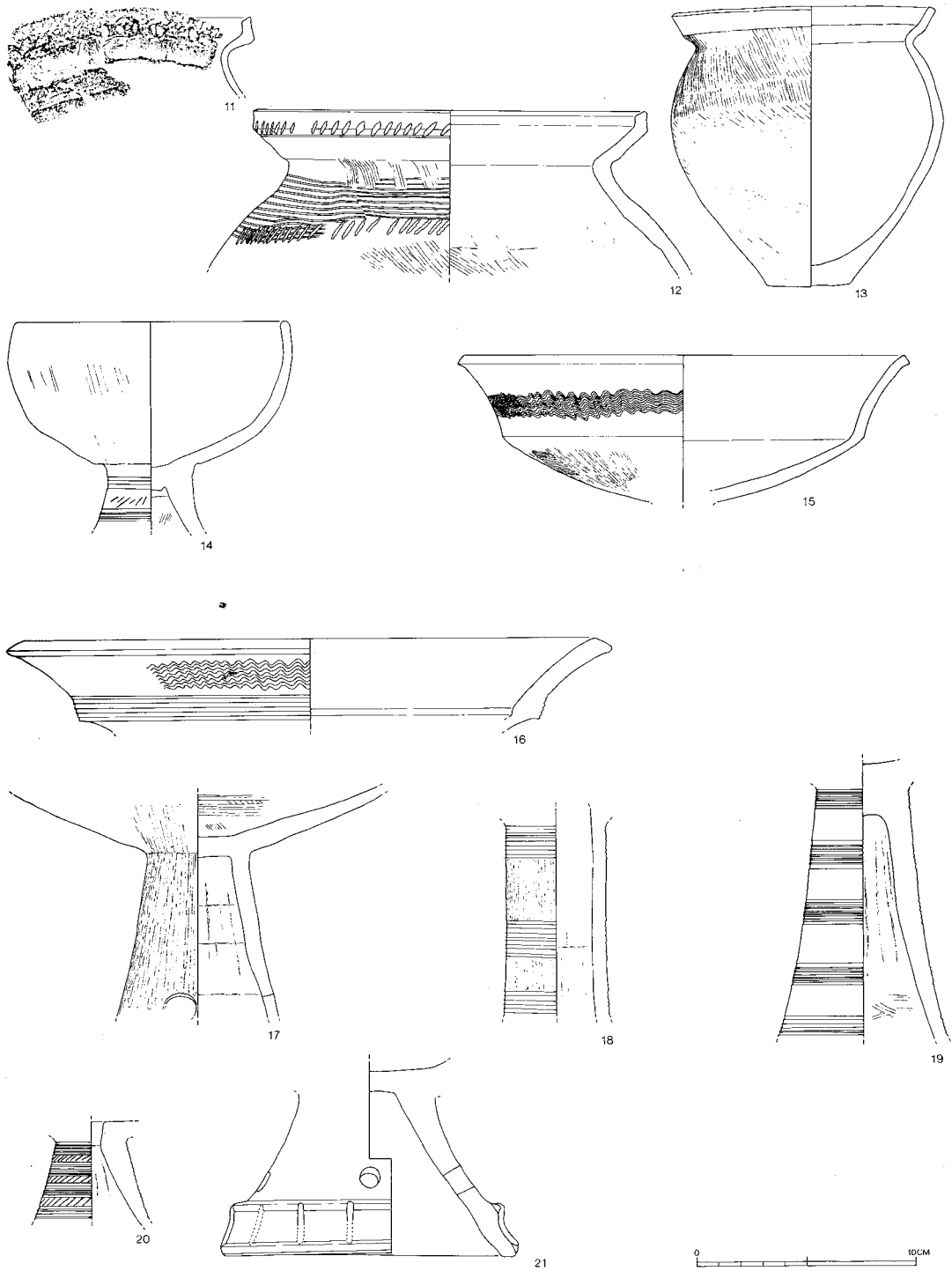
をもつと考えられる。脚部上位に4条のクシ描き直線紋が2帯施される。

甕形土器 A(第5図6～10) 単純口縁の甕形土器である。6は口縁部のみの細片で暗黄褐色を呈する。径1mm以下の白色砂粒を含む。焼成・胎土ともに良好。口縁端部は角張る。外面は縦方向に内面及び口縁端面は横位にハケ目調整が施される。口縁端部にハケ状工具による刺突紋を廻らす。7は胴部上半から口縁部にかけての破片で口縁部にて約5分の1を残し、推定口径14.4cmである。やや赤みを帯びた黄褐色を呈する。胎土には径0.5～2.0mmの白色砂礫を多く含む。くの字状に強く屈曲する頸部はわずかに内湾ぎみに開き、口縁端部に到って明瞭に外反する。口縁端部は丸みを帯びる。胴部内外面ともにハケ目調整がなされているが風化のためはっきりしない。頸部から口縁部にかけては内外面ともに丁寧にヨコナデされる。8は口縁部にて約4分の1を残す。推定口径19.3cm。焼成は良好で暗黄褐色を呈する。頸部はやや直立ぎみに立ち上がったのちゆるやかに外反し口縁端部は丸く納まる。胴部外面は縦に内面は横にハケ目調整がなされ、口縁部は内外面ともに丁寧にヨコナデされる。9は口縁部にて約2分の1を残し、推定口径16.0cmを測る。赤みを帯びた黄褐色を呈し、胎土には径0.5～1.0mmの白色砂が目立つ。頸部から口縁部にかけては緩やかに直線的に開き、口縁端部は角張り面を持つ。胴部内外面はハケ目調整がなされるが、風化が激しくはっきりしない。頸部から口縁部にかけてはヨコナデされる。10は胴部下位から口縁部まで残る資料で口縁部にて約3分の1を残す。径0.5～1.0mmの白色砂粒を多く含み焼成はやや悪く赤みを帯びた黄褐色を呈する。胴部はあまり膨らむことなく頸部から口縁部にかけては直立ぎみに開く。口縁端部は角張り面を有する。風化が著しい。

甕形土器 B(第6図11～13) 受口状口縁を持つ甕である。11は口縁部のみ約8分の1残存する。推定口径16.2cm。焼成良好で淡灰黄褐色を呈する。器壁は薄く概ね0.4cm程である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、口縁端面は内面を向く。口縁端部はこころもちつまみあげられる。口縁部にはクシ状工具による連続刺突紋と刺突羽状紋が廻る。12は口縁部にて約4分の1を残す。推定口径18.0cm。焼成はややあまく、暗褐色を呈する。頸部はくの字状に屈曲し、受口部は短くわずかに内傾する。口縁端面は内側を向く。胴部外面は縦ないし斜めに、内面は斜めにハケ目調整される。胴部上位にはクシ状工具による刺突紋とわずかに波状をなすクシ描き直線紋が施され、口縁部にはクシ状工具による連続刺突紋が廻らされる。13は口縁部を約4分の1欠損するほかはほぼ完形である。口径11.5cm、底径3.9cm、高さ12.9cmである。焼成はややあまい。黄褐色を呈する。胴部は中央より上位に最大径をもち口縁部は開きぎみに立ち上がる。口縁端部は明瞭に面取りされ外傾する。胴部外面は縦ないし斜めにハケ目調整が施され、口縁部は丁寧にヨコナデされる。高坏形土器 A (第6図14) 碗状の坏部を有するものである。14はほぼ完形の坏部を有し脚部を欠損する。口径12.1cmである。焼成は良好で暗黄褐色を呈する。口縁部はわずかにすぼまる。坏部外面および脚部内面にはハケ目調整がみられる。脚部には3条の直線紋が2帯施され、その間にラフな連続刺突紋が施される。連続刺突紋はフネガイ科のように放射肋をもつ二枚貝の腹縁を用いて施紋されていると考えられる。



第5図 弥生時代の土器 (1) (S X 1出土) (1 : 3)



第6図 弥生時代の土器 (2) (S X 1出土) (1:3)

高坏形土器 B (第 6 図 15 ~ 19) 盤状の坏部をもつものである。15 は坏部のみ約 3 分の 1 を残す。推定口径 20.6cm。胎土は良好であるが、焼成は悪く風化が著しい。黄褐色を呈する。坏部には稜をもち口縁部は外反する。口縁端部は角張って端面をもつ。坏部下半は斜めにハケ目調整されたのち縦にヘラミガキが加えられ、口縁部はヨコナデされている。口縁部外面には 11 条のクシ描き波状紋が施される。19 と同一個体の可能性がある。16 は口縁部のみの小片で約 5 分の 1 を残す。推定口径約 26.0cm。胎土・焼成ともに良好である。灰黄褐色を呈する。坏部の稜は非常に明瞭で直立ぎみに立ち上がり、くの字状に屈折して大きく外方へ開く。口縁端面はあまり明瞭ではない。口縁部外面は丁寧にヨコナデされている。坏部稜付近には 6 条のクシ描き直線紋が施され、口縁部には 7 条のクシ描き波状紋が施されている。17 は坏部下半と脚部上半を残す。胎土・焼成ともに良好で赤みを帯びた黄褐色を呈する。外面は縦方向に入念にヘラミガキされ、部内面は斜めないし横にハケ目調整されている。脚部には 3 方に円孔をもつ。18 は脚部のみの資料である。径 0.5 ~ 3.0mm の白色砂礫を多く含む。赤みを帯びた黄褐色を呈する。直立した脚部である。外面は縦にヘラミガキされている。8 条のクシ描き直線紋が 3 帯みられる。19 も脚部のみ残る資料である。胎土は良好であるが焼成はややあまい。やや赤みを帯びた黄褐色を呈する。脚部は直線的に開く。6 条のクシ描き直線紋が 5 帯みられる。

器台形土器 (第 6 図 20) 脚部のみ残る小型器台形土器である。焼成はあまく風化が著しい。淡黄褐色を呈する。脚部は直線的に開き胴底部内面は平坦である。4 条の直線紋が 4 帯みられ、その間に貝殻腹縁による連続刺突紋が 1 帯ずつ計 3 帯施されている。

器種不明土器 (第 6 図 21) 脚台のみの資料である。脚部径 13.8cm。胎土には径 2.0 ~ 5.0mm の白色礫を多量に含み、焼成は悪く風化が著しい。赤みを帯びた黄褐色を呈する。脚端部付近には幅約 5.0mm、厚さ 2.0 ~ 3.0mm の貼付突帯紋を 2 帯めぐらし、さらに長さ約 20.0mm、幅・厚さともに約 3.0mm の突帯を垂直に間隔をおいて貼り付けている。4 方に円孔を有する。

3. その他の遺物 (第 7 ~ 8 図)

古墳の墳丘調査時に盛土に混入して出土したものである。

壺形土器 (第 7 図 22 ~ 23) 22 は胴部のみ約 5 分の 3 残存する資料で脚台をもつと考えられる。最大径 12.0cm。赤みを帯びた黄褐色を呈する。胎土は良好であるが、焼成はやや悪く脆い。胴部を成形したのち胴底部を貼付している。胴部は整った円弧をなし、胴底部に到って大きく屈曲し平らな胴底部を形づくる。胴部外面には貼付突帯紋が 4 本廻る。貼付紋の間には貝殻腹縁による連続刺突紋が 3 帯施され、上から一帯めは斜格子紋、二帯めは鋸歯紋となっている。胴部外面最下部には 4 条 1 単位の直線紋が 1 帯施されている。23 は台付壺形土器の脚部と考えられ、約 4 分の 3 を残す。推定径 11.6cm、赤褐色を呈する。焼成は良好で胎土に径 0.5 ~ 3.0mm の白色砂礫を混入する。脚部はわずかに外反しながら開き端部断面は丸みを帯びた方形を呈する。外面は縦方向にヘラミガキされ端部は丁寧に

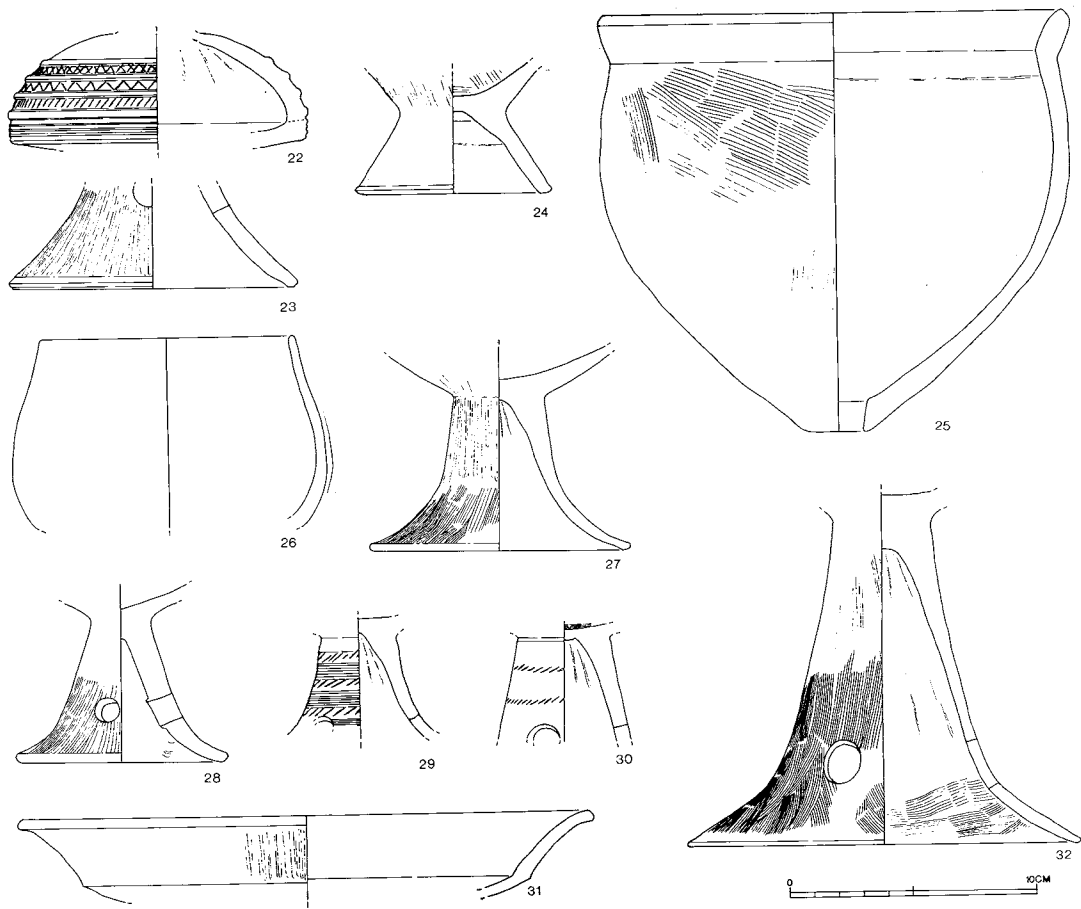
ヨコナデされる。端面中央はヨコナデによって凹線様に窪んでいる。内面は横ないし斜めにハケ目調整がなされる。3方に円孔をもつと思われる。

甕形土器 (第7図24) 台付甕形土器の脚部であると考えられる。約4分の1を残し、推定径5.9cmである。淡黄褐色を呈する。焼成は良好であるが胎土は粗く径2.0cm前後の白色砂礫を多く混入する。脚部は直線的で、明瞭な端面を有する。胴部は内外面ともにハケ目調整がなされ、脚部の内外面は丁寧にヨコナデされている。

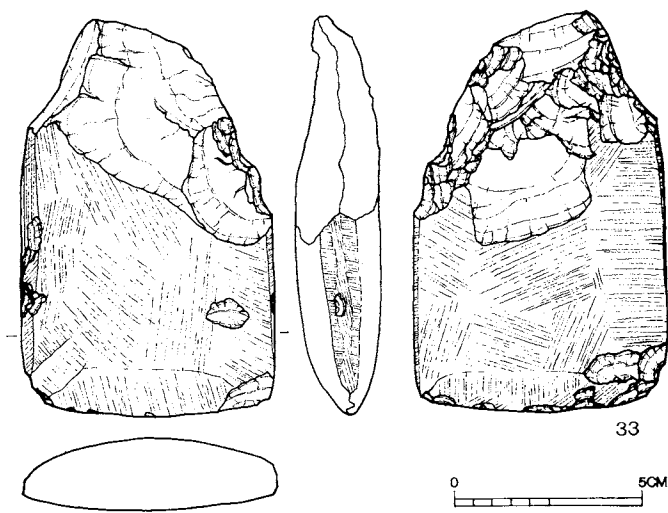
鉢形土器 (第7図25) 底部に焼成前に穿たれた円孔をもつ鉢形土器である。口縁部にて約10分の1を残す。推定口径18.4cm、底径2.5cm、高さ16.9cmである。黄褐色を呈する。外面の風化が著しい。胴部中央よりやや上に最大径をもち、以下はほぼ直線的にすぼまる。やや肥厚した口縁部の立ち上がりは短く、端部はわずかに角張る。胴部外面上半は斜めにハケ目調整がなされ、下半は縦方向にハケ目調整がなされているようである。口縁部内外面はヨコナデされる。

高坏形土器 A (第7図26～30) 26は碗状の坏部のみ資料である。口縁部にて約7分の1を残す。推定口径10.0cmを測る。赤みを帯びた黄褐色を呈する。坏部は口縁部にてすぼまり、胴部下方にて丸く膨らむ。外面は縦方向にヘラミガキ、内面は斜めにハケ目調整されたあと、かるくなでられているようである。口縁部内外面はヨコナデされる。27～30は碗状の坏部をもつ高坏の脚部と考えられる。27は脚部端にて約6分の1残す。推定脚部径10.0cm。淡黄灰色を呈する。焼成は悪いが、胎土は良好である。風化が著しい。脚部は小さく開き中程にて屈曲ぎみに大きく外反する。脚部外面下半は縦にハケ目調整がなされ、上半から坏部下位にかけては縦方向にヘラミガキされる。28は脚部端にて約2分の1を残す。脚部径8.1cm。赤みを帯びた黄褐色を呈する。胎土には径0.5～1.0mmの白色砂を少し含む。風化が著しい。外反する脚部は中程より下位にてわずかに屈曲する。脚部外面は縦方向にハケ目調整がなされている。3方に円孔を有する。29は坏部と脚部端を全く欠く。淡黄褐色を呈する。焼成はあまい。脚部はゆるやかに外反する。1単位6条の直線紋が3帯みられ、その間に貝殻腹縁に連続刺突紋が施されている。円孔を有する。30も坏部及び脚部端を全く欠損する。赤褐色を呈する。焼成が良好で、胎土には径0.5～4.0mmの白色砂礫を含む。脚部外面は縦方向にヘラミガキしたあと貝殻腹縁紋による連続刺突紋を2列施し、紋様以外の部分をヨコナデしている。わずかに残る坏部内面にはハケ目調整がみられる。3方に円孔を有する。

高坏形土器 B (第7図31～32) 31は坏部をわずかに残す。推定口径22.7cm。暗黄褐色を呈する。焼成良好。口縁部は大きく開き、口縁端は丸みを帯びて明瞭な端面となっていない。外面は縦方向にヘラミガキされる。32は脚部のみ資料で脚部端にて約4分の1を残す。推定脚部径15.6cm。黄褐色を呈する。焼成はやや悪く、器壁が剥奪されている。直線的に開く脚部は下位にてわずかに屈曲しながら大きく外反する。外面は縦に内面は横にハケ目調整がなされる。3方に円孔をもつ。



第7図 弥生時代の土器 (3) (1:3)



第8図 弥生時代の石器 (1:2)

石斧（第8図33）砂岩製。長さ10.65cm、幅6.80cm、厚さ2.25cmを測る。基部側は欠損後粗く打ちかかっている。加工用石斧の範疇に含まれると考えられるが、典型的な扁平片刃石斧のような明瞭な片刃にはならず刃部縦断面は丸みを帯びる

IV. 南山 6 号墳

1. 調査前の墳丘（第 9 図）

南山古墳群は鈴鹿川左岸の標高約 35m の台地上に位置し、鈴鹿川の小支流我入坊川によって浸食された比高差約 15m の谷をみおろす断崖の縁辺に沿って連なっている。南山 6 号墳周辺は雑木の茂る山林となっており、これらの古墳群の残る山林と県道鈴鹿宮妻線との間は植木畑として利用されている。6 号墳は高さ 1m の小円墳で南東に接する高さ約 3.5m の 5 号墳に比してあまりめだため存在であった。墳丘の北東には戦時中に掘削されたと伝えられる方形の土壇があり、そのときの排土が墳丘との間に盛られていた。古墳は台地の縁辺ぎりぎりに築かれているため、西側は盛土の斜面がそのまま段丘の斜面につながっていた。

2. 埋葬主体部（第 10 図）

主体部は横穴式石室で南西に開口する。主体部ほりかたの深さは墳頂から約 1.5m で、地山を 0.4m 程掘り抜いている。石室の石材は天井、奥壁、側壁とも基底部の一部を除いてほとんど失われていた。主体部の埋土はしまりがなく推積してからあまり年月を経っていないことが考えられる。石室基底部は南東壁及び敷石を除き原形を保っておらず、奥壁と南東壁側には石材の抜き取り痕跡をわずかに留めている。石室の石材には長さ 0.3m、幅 0.2m、厚さ 0.1～0.2m 前後の花崗岩の転石が用いられている。基底部には拳大の礫が敷き詰められており、その分布範囲よりかろうじて玄室と羨道を識別することができる。石室の測定値については概数にならざるをえないが、玄室は長さ約 3.5m、幅約 1.4m を測る。敷石に混ざって棺台とみられる敷石より大きめの石材の集中が 2ヶ所ある。袖石の抜き取り痕と思われる落ち込みも認められるが玄門と思われる部分の残りが特に悪く石室の形態について言及することは避けたい。羨道は玄門付近から約 1.3m で斜面に達し途切れている。

3. 埋葬主体部の遺物（第 11～14 図）

土師器高坏 14 点、壺 1 点、埴 2 点、須恵器坏蓋 6 点、坏身 9 点、高坏 1 点、壺 2 点、鉄鏃 2 点、刀子 2 点、不明鉄器の細片 1 点が出土している。完形で出土したものが少なくほとんどが原位置を保っていないなかで、南東側壁付近から出土した土師器埴 2 点（第 12 図 17・18）と須恵器壺（第 13 図 35・36）だけが南東側壁基底石とともに原位置を保っている。遺物の分布は奥壁側の棺台付近に集中している。（第 11 図）。

土師器高坏 A（第 12 図 1～7）埴状の坏部をもつ高坏である。胎土は良好で白色砂礫を少量含み、赤みを帯びた黄褐色を呈する。赤黄褐色を呈し胎土は良好である。坏部口径 6.6～8.3cm、脚部径 7.2～7.9cm、高さ 9.5～10.9cm で法量・形状ともに均質な資料である。口縁部はややすぼまり端部は外反する。内傾する端面を有する。内湾する脚部は下方にて屈曲ぎみに外反する。稚拙な作りで、均整を欠く。坏部と脚部は別々に成形され、つぎ目



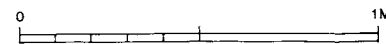
第9図 調査前測量図 (1 : 100)



第 10 图 埋葬主体部実測図 (1 : 40)



第 11 图 埋葬主体部遺物分布图 (1 : 20)



を中心に軽くヘラケズリが施される。口縁部及び脚部端内外面は丁寧にヨコナデされる。坏部内面は中央部を中心にして工具を少しつつ回転させながら器面調整を行っているようである。

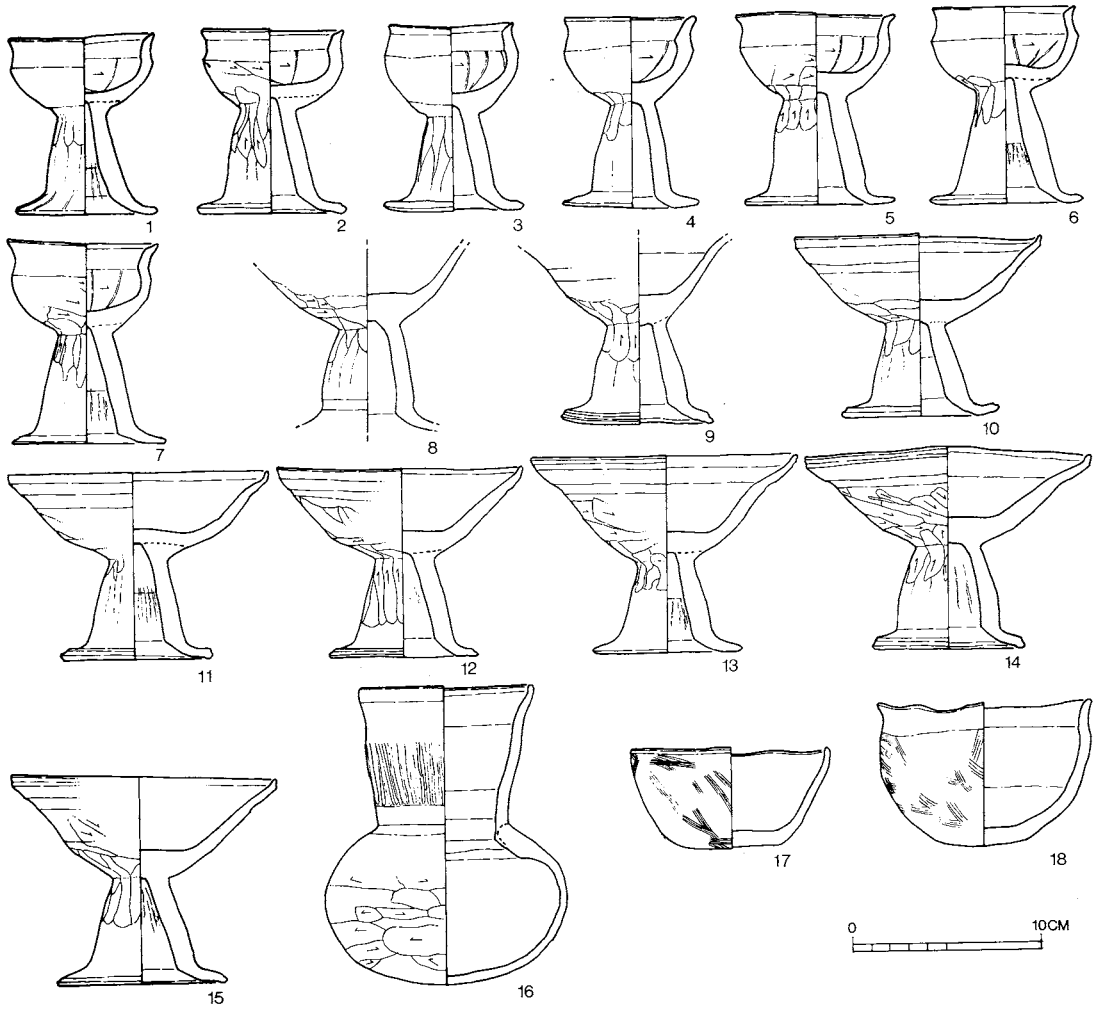
土師器高坏 B (第 12 図 8 ~ 15) 朝顔形の坏部を有する一群である。白色砂礫を含み、赤みを帯びた黄褐色を呈する。口径 12.9 ~ 15.0cm、脚部径 7.6 ~ 8.6cm、高さ 9.7 ~ 10.3 cm を測り、高坏 A 同様、法量・形状にまとまりがある。脚部の形態は高坏 A に酷似する。坏部は大きく開き、口縁部付近で一旦かるく外反したのち端部にて上方につまみ上げられ、やや受口状を呈する。坏部と脚部は別々に成形されたのち接合され、つぎ目付近を中心に軽くヘラケズリされている。口縁部・脚部端はヨコナデされる。

土師器壺 (第 12 図 6) 口縁部を 4 分の 3 欠損するほかはほぼ完形。推定口径 9.2cm、高さ 15.8cm を測る。焼成は良好で、赤みを帯びた黄褐色を呈する。やや潰れた球形の胴部にほぼ直線的な筒状の頸部が付く。口縁部が小さく外反し端部がわずかにつまみ上げられる点は高坏 B の口縁部の形態と同じである。口頸部は縦にヘラミガキされ胴部は横にヘラケズリされる。

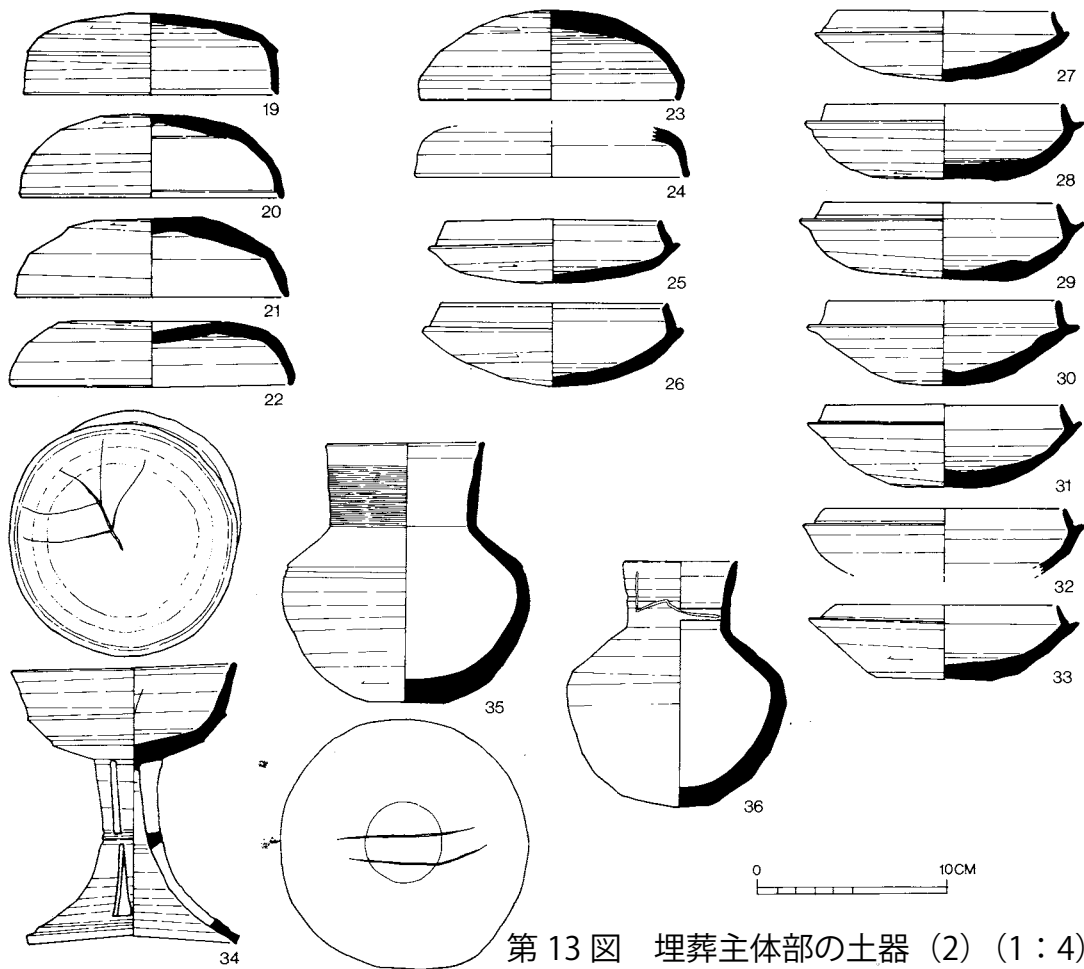
土師器甗 (第 12 図 17 ~ 18) 須恵器壺 (第 13 図 35 ~ 36) に隣接し、重なって出土した。焼成があまく風化が著しい。黄褐色を呈する。胴部外面は不定方向のハケ目調整が施され、口縁部はヨコナデされる。17 は口径 10.3cm、高さ 5.4cm。口縁端部は小さく内湾する。18 は口径 11.1cm、高さ 7.7cm 口縁部はわずかにすぼまり端部はかるく外反する。

須恵器坏蓋 (第 13 図 19 ~ 24) 稜をもつもの (19) と稜を持たないもの (20 ~ 24) に大別できる。19 は口径 13.3cm、高さ 4.3cm、20 ~ 24 は口径 13.7 ~ 14.4cm、高さ 3.5 ~ 4.8 cm である。19 は砂礫を多く含み、焼成があまく淡灰色を呈する。口縁部は直立し端部には面をもつ。天井部外面には約 3/4 に回転ヘラケズリが施される。20 ~ 24 は焼成良好で暗青灰色を呈する。20・21・23 は丸い天井部をもち、22 は天井部が窪む。羨道付近出土である。20 は口縁端部に面をもち、22・23 は口縁部がやや内湾する。24 は口縁部のみ約 2 分の 1 残す。

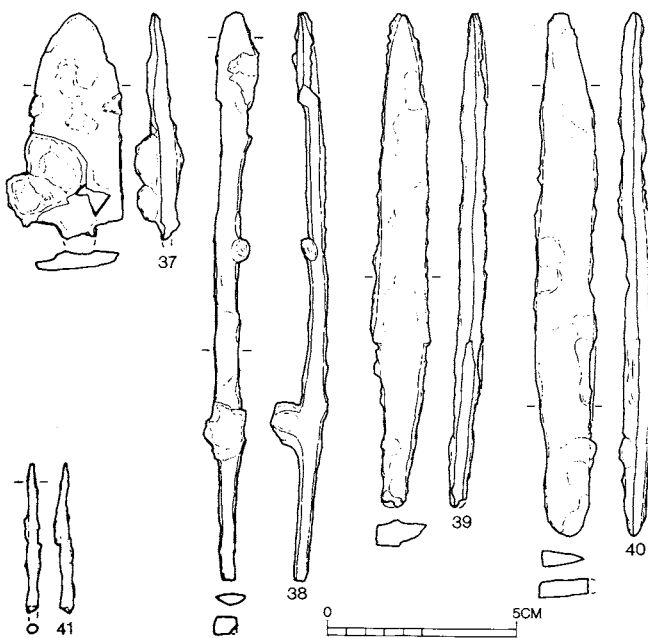
須恵器坏身 (第 13 図 25 ~ 33) 口縁端部に面をもつもの (25・26) ともたないもの (27 ~ 32)、底に平坦部をもつ逆台形のもの (33) がある。25 は口径 11.4cm、高さ 3.4cm、26 は口径 11.9cm、高さ 4.5cm、27 は口径 11.4cm、高さ 3.7cm、28 ~ 32 は口径 12.2 ~ 12.8cm、高さ 4.0 ~ 4.4cm、33 は口径 11.7cm、高さ 4.0cm である。26・27・31・32 は焼成が悪く、淡灰色ないし淡青灰色を呈する。25 は底部外面を 3/4、26 は 2/3 をヘラケズリされている。27 は比較的器高の低いものである。底部外面は回転ヘラケズリされたのち指オサエと一定方向のナデがみられる。坏蓋 (22) とともに羨道付近の出土である。28・29 は丸い腰部をもつものである。出土状況から坏蓋 20・21 とセットになると思われる。ともに底部外面のごく狭い範囲をヘラケズリされ、内面には一定方向のナデが施される。30 は口縁部にて 3 分の 1 を残す破片で、外面には自然釉がかかり須恵器片が粘着している。口縁部は直立ぎみに立ち上がる。31 は底部が約 2 分の 1 ヘラケズリされる。32 は口縁部にて約 4 分の 1 を残す小片である。33 は底部を木口様の工具によって一定方向に掻き削られたのち雑な回転ヘラケズリが施される。



第11図 埋葬主体部出土の土器 (1:4)



第13図 埋葬主体部の土器 (2) (1:4)



第14図 埋葬主体部の鉄製品 (1:2)

須恵器高坏 (第 13 図 34) 長脚 2 段 3 方透かしの無蓋高坏である。口径 11.8cm、脚部径 10.9cm、高さ 14.8cm を測る。焼成良好で灰色を呈する。口縁端部にはかすかに段をもつ。坏部内面には葉脈様のヘラ記号が施されている。

須恵器壺 (第 13 図 35 ~ 36) 土師器壺 (第 12 図 17・18) とともに東西側壁近くより出土した。35 は口径 8.3cm、高さ 13.8cm である。焼成良好で灰色を呈する。直立した幅の広い口頸部をもち、端部には段をもつ。底部にはわずかに平坦部を有する。2 条の沈線が施され、口頸部はカキ目調整される。胴部下位は回転ヘラケズリされる。底部にはヘラ部号が施されている。36 は口径 6.0cm、高さ 13.0cm である。胎土には径 0.5 ~ 2.0mm 前後の砂礫を含み、焼き膨れがみられる。暗青灰色を呈する。比較的小さめの頸部が附くものである。口縁部はやや内湾し、口頸部中程に段をもつ。底部には極めて雑な不定方向のナデや指オサエが施され、焼成時に亀裂を生じている。頸部にはヘラ記号が施されている。

鉄鏃 (第 14 図 37 ~ 38) 37・38 とともに尖根鏃で基部を欠損する。37 は幅 2.5cm である。38 は幅 1.0cm で長いのかつぎをもつ。

刀子 (第 14 図 39 ~ 40) 主体部の長軸に並行して出土した。39 は長さ 13.1cm、幅 1.5cm、厚さ 0.7cm で基部をわずかに欠損する。40 は長さ 13.9cm、幅 1.6cm、厚さ 0.9cm で身部を一部欠損する。

? (第 14 図 41) 長さ 40cm、幅 0.4cm、厚さ 0.3cm で、一端を欠く。

4. 盛土と周溝

盛土は現存高約 1.4m を測る。黒色土、黄褐色土が交互に盛られ、地山の直上には旧表土と考えられる灰黄褐色土が確認できる。南山 6 号墳の位置する台地周辺は周知のとおり黄褐色土ないし赤黄褐色土に覆われているため、墳丘の造営に際し黒色土を他所より持ち込んでいることも考えられる。あるいは、かつてこの付近も黒色土に覆われていたのかもしれない。

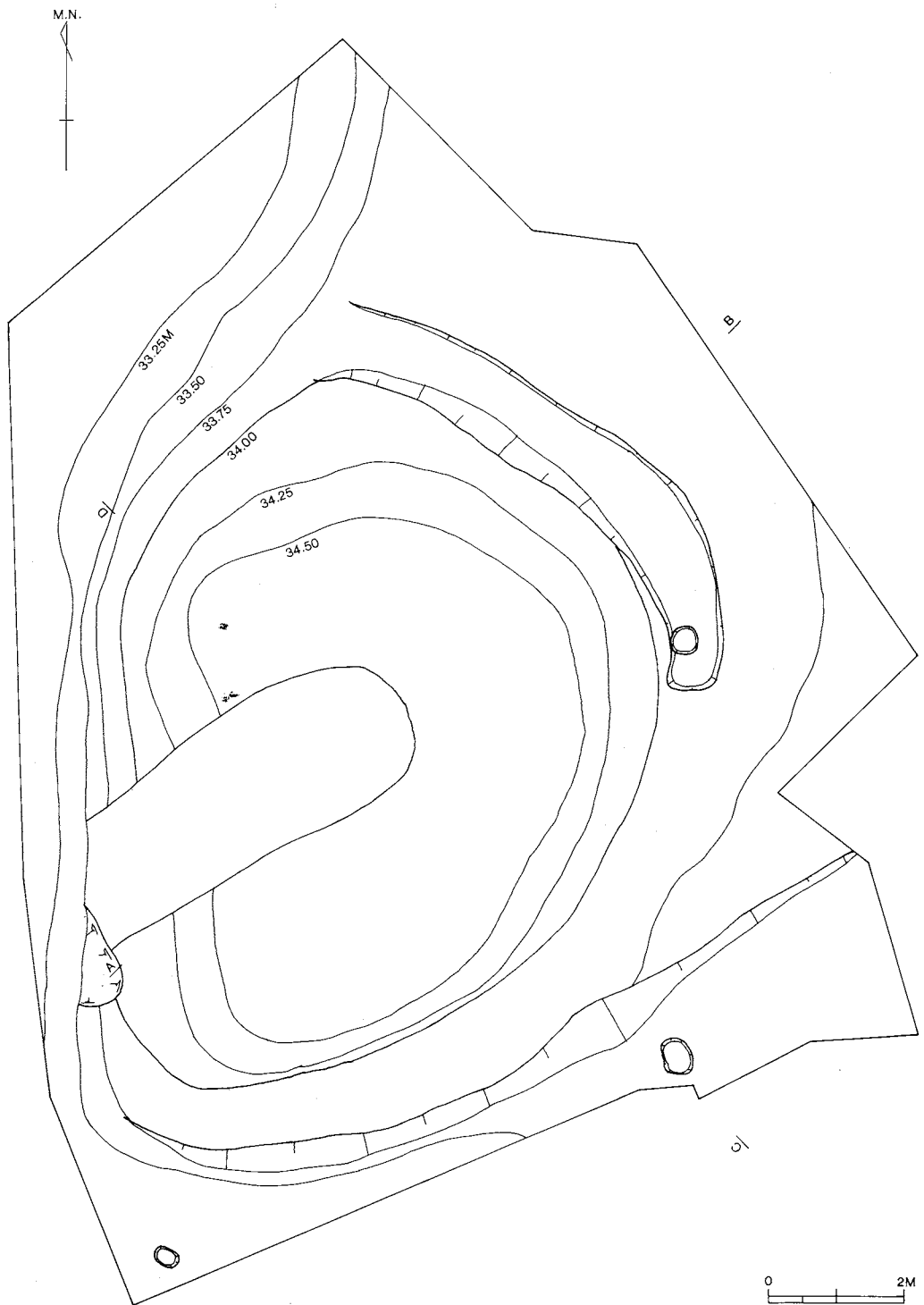
周溝は墳丘の北東と南に検出された。北東部のものは検出面の幅 0.7 ~ 1.2m、深さ 0.3m で、埋土は墳丘側から流れ込んでいる。南部分の周溝は隣接する 5 号墳と共有している。埋土の堆積状況から、5 号墳の造営が 6 号墳に先立つと判断される。

5. その他の遺物 (第 17 図)

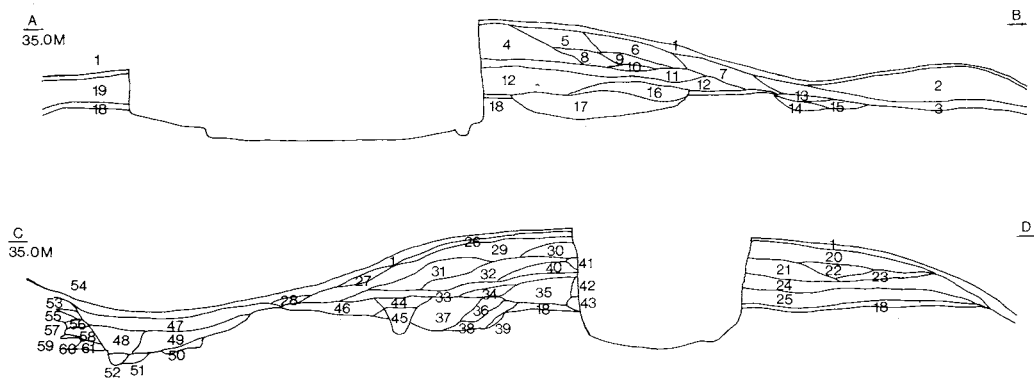
周溝南部分から須恵器はそうと提瓶 (第 17 図 42・43) が、墳頂から須恵器坏身 (第 17 図 44) が出土している。

須恵器壺 (第 17 図 42) 口縁部を欠損する。焼成良好で暗灰色を呈する。胴部よりはるかに大きいラップ状に開く口頸部をもつ。口縁部は受口状となる。胴部と口頸部に沈線紋と列点紋が施される。胴部中程以下はヘラケズリされる。

須恵器提瓶 (第 17 図 43) 底部を欠損する。環状把手は両側とも欠損しているが、片方は焼成前に欠損している。口径 7.3cm、暗灰色を呈する。受口ぎみの口縁部をもつ。

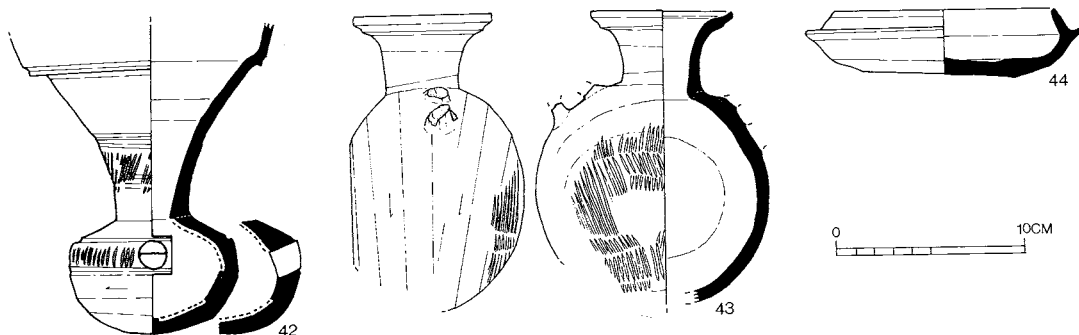


第 15 図 調査後測量図 (1 : 100)



第 16 図 盛土断面図 (1 : 100)

- | | | |
|--------------------|------------|------------|
| 1. 表土 | 22. 黄褐色土 | 43. 黄褐色土 |
| 2. 黄褐色土 (最近の土壤の排土) | 23. 褐色土 | 44. 暗褐色土 |
| 3. 旧表土 | 24. 黒色土 | 45. 黒色土 |
| 4. 黒混黄褐色土 | 25. 暗褐色土 | 46. 暗黄褐色土 |
| 5. 黒色土 | 26. 暗褐色土 | 47. 暗黄褐色土 |
| 6. 褐色土 | 27. 暗黄褐色土 | 48. 褐混黒色土 |
| 7. 黒色土 | 28. 暗褐色土 | 49. 褐色土 |
| 8. 黄褐色土 | 29. 黒色土 | 50. 暗褐色土 |
| 9. 暗黄褐色土 | 30. 黄褐色土 | 51. 黄混褐色土 |
| 10. 暗黄褐色土 | 31. 黒混黄褐色土 | 52. 攪乱 |
| 11. 黒色土 | 32. 黄混褐色土 | 53. 黄混暗褐色土 |
| 12. 暗褐色土 | 33. 黒色土 | 54. 暗褐色土 |
| 13. やや黄色みを帯びた黒色土 | 34. 褐色土 | 55. 暗褐混黒色土 |
| 14. 黒色土 | 35. 黄混暗褐色土 | 56. 黄混暗褐色土 |
| 15. 暗黄褐色土 | 36. 褐色土 | 57. 黄褐色土 |
| 16. 暗褐色土 | 37. 暗褐色土 | 58. 暗褐混黒色土 |
| 17. 暗黄褐色土 | 38. 黄混褐色土 | 59. 黄混暗褐色土 |
| 18. 灰黄褐色土 | 39. 暗黄褐色土 | 60. 黒色土 |
| 19. 褐色土 | 40. 褐色土 | 61. 黄混黒色土 |
| 20. 暗黄褐色土 | 41. 褐混黄褐色土 | |
| 21. 黄混褐色土 | 42. 黒混黄褐色土 | |



第 17 図 その他の土器 (1 : 4)

須恵器坏身（第 17 図 44）完形。胎土には砂礫を含む。焼成不良で淡青灰色を呈する。底部はヘラ切り未調整で、内面はナデが施される。

V. まとめ

1. 南山遺跡

今回の発掘で検出された唯一の弥生時代の遺構である SX1 は、6号墳の造営によって破壊されているため本来の形状を留めていないが、以下の事実をもって墳丘墓(1)に伴う溝の一部と考えたい。すなわち、まず第一点として出土土器の器種があげられる。SX1 埋土からは5点の高環形土器(第6図14～19)をはじめ、器台形土器(第6図20)、特殊な脚台をもつ土器(第6図21)などが出土し、いわゆる供献用の器種が卓越している。第5図2の壺形土器には5対の補修孔が穿たれていることから破損後も修復して使用され続けたことが窺われ、この土器の取り扱われ方には興味深いものがある。さらに、6号墳の盛土中から出土した貼付突帯紋によって飾られた土器(第7図22)も本来 SX1 に伴っていた可能性が考えられ、ますますこの遺構の特殊性が浮かびあがる。第二点に SX1 の形態的な特徴に注目したい。つまり、遺構の上端外側の平面形が不整な曲線を描くのに対して、内側は直線的でほぼ直角に折れ曲がっている。断面形態も内側においては急角度であり、明らかに内側の形状を意識している。このような特徴から方形周溝墓などの墳丘墓に伴う溝の一部であると判断したい。

三重県下において、弥生時代後期初頭から終末期までの墳丘墓は当遺跡を含め 25 遺跡で 95 基検出されている。市内では不確実であるが上箕田遺跡で一基検出され(2)、扇広遺跡でも後期のものが一基検出されている(3)。後期の方形周溝墓では、まとめて検出された草山遺跡(4)や寺垣内遺跡(5)にみられるように溝の中央に陸橋をもつ例や一角に陸橋をもつ例が比較的多い。とくに前者については今のところ後期の方形周溝墓に限定できる特徴であると云えそうである。当遺跡の SX1 は古墳の造営により著しく改変を被っているため本来の形態は明らかではないが、かろうじて残存する周溝の形態から溝の中央に陸橋をもつタイプであることが推測できる。

さて、SX1 出土の土器群は出土レベルにばらつきがあり必ずしも一括資料とは云えないなかで第5図2・10、第6図13・15・19は遺構埋土下層からある程度まとまりをもって出土している。そこで、少なくともこれら5点はセットとして扱ってさしつかえないと思われる。さらに、他の遺跡の類似の一括資料、例えば、高松弥生墳墓主体部出土土器(6)や草山遺跡 SX179 出土土器(7)と比較すると、南山遺跡 SX1 出土土器のうち第5図3の壺形土器の形態的な特徴は双方の土器群にもみられる。

また、SX1 出土の土器は出土位置の明らかなもの以外も大部分が溝の北ないし北西部分に集中していることを考え合わせれば、ほとんどが同一時期の所産であると考えたい。

東海地方西部の弥生時代後期について山中期→欠山期という時期設定がなされ、それぞれ後期前半・後半という理解がなされて久しく(8)、今日においても大きな流れとしては変わらない。これを受けて、伊勢湾西岸においては高環形土器を指標に上箕田→西ヶ広→

高松という変遷が考えられている(9)。ただし、それぞれの器種構成については不明な点が多い。一方、最近では伊勢湾周辺地方の中期の編年に後続させる形で後期中葉までの変遷案が提出されている(10)。これら従来の編年案に照らし合わせれば、南山SX1出土土器群は大枠では山中期に含まれ、県下の編年案では上箕田期に該当し、さらに伊勢湾周辺地方という大きな範囲で変遷を捉えた石黒編年では後期2にあたる。伊勢湾西岸における当時期のより確かな器種構成の把握と、成形及び調整技法などの技術的な特徴により裏付けられた土器群変遷の解明については、より近隣において保存状態の良好な一括資料の検出を待たねばならない。

2. 南山6号墳

横穴式石室を主体部にもつ古墳の調査例は市内では4例目となり、鈴鹿川流域における発見例としては17例目となった(11)。以前から横穴式石室導入に対する消極性が指摘されてきた地域ではあるが少しづつ発見例が増えつつある。同流域においてこれまでに明らかになっている例をみる限り左片袖式のものめだち、石室規模は玄室長で4.0mから5.0m前後である。流域内で規模内容ともに最も傑出した存在は井田川茶白山古墳で副葬品の豊富さには目をみはるものがある。年代的には6世紀初めの築造が考えられており、今のところ鈴鹿地方で最も早く横穴式石室が採用された古墳である。

さて、南山6号墳の調査は石薬師東古墳群や丸山古墳群などのように実体が不明のまま消滅した古墳が多い鈴鹿川下流域左岸において貴重な調査例となっただけでなく、鈴鹿川流域において横穴式石室の新資料を提供することとなった。石薬師周辺の横穴式石室をもつ古墳としては比較的大型で前方後円墳とも云われる南町古墳と大谷古墳が知られてきたが、双方とも調査のなされないうちに破壊されているため、南山6号墳が最初の正式な発掘調査例となった。石室内より出土した須恵器第13図19～32はTK10～TK43型式に相当することから6世紀後半の築造を考えることができる。近い時期のものには亀山市の正知浦2号墳(12)、太岡寺3・4号墳(13)があり、後続するものとして保子里18号墳(14)、北野古墳(15)、正知浦1号墳(16)がある。さらに、最終末のものとしては蛸田古墳(17)、深溝狐塚古墳(18)などがある。なお、須恵器第13図33が出土していることから7世紀初頭に追葬を想定することができる。6号墳主体部からは小古墳ながら比較的多くの土器が出土したが、とくに個性的なのは15点もの出土をみた土師器高坏であろう。なかでもワイングラス様のもの(第12図1～7)がこれほどまとまって出土した例はあまりしられていない。近くでは井田川茶白山古墳に類例がある。今後の付近の調査例に注目していきたい。

〔註〕

- 1) 都出比呂志 (1986) 「墳墓」『岩波講座日本考古学 4 集落と祭祀』(岩波書店)
- 2) 大場範久・真田幸成・仲見秀雄 (1970) 『上箕田弥生遺跡第二次調査報告』(鈴鹿市教育委員会)
- 3) 1990 年鈴鹿市教育委員会調査
- 4) 榎本義讓 (1983) 『草山遺跡発掘調査月報』No.4・5・7(松阪市教育委員会)
- 5) 三重県教育委員会 (1988) 「寺垣内遺跡発掘調査概要」『第 6 回三重県埋蔵文化財発掘調査報告資料』
- 6) 谷本鋭次 (1970) 『高松弥生; 墳墓発掘調査報告』(津市教育委員会)
- 7) 榎本義讓 (1983) 『草山遺跡発掘調査月報』No.7(松阪市教育委員会)
- 8) 大参義一 (1968) 「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文化部研究論集』XLV II
- 9) 小玉道明・谷本鋭次・下村登良男・山沢義貴 (1970) 「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会)
- 10) 石黒立人 (1987) 「高蔵式から山中式へ(予察) - 「仮称見晴台式」をめぐる -」『第 3 回東海埋蔵文化財研究会欠山式土器とその前後・研究報告編』
- 11) 1988 年鈴鹿市教育委員会調査の蛸田古墳を含めれば 18 例
- 12) 駒田利治・浅尾悟 (1988) 『一般国道 1 号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要 IV』(三重県教育委員会)
- 13) 真田幸成 (1964) 『名阪国道敷地内埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会)
- 14) 仲見秀雄・真田幸成 (1964) 「保子里 18 号墳発掘調査報告」『神戸史談』第 6 号(神戸高等学校郷土史クラブ)
- 15) 大場範久 (1978) 「北野古墳」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』(鈴鹿市教育委員会)
- 16) 12) に同じ
- 17) 鈴鹿市教育委員会 (1988) 「蛸田古墳」『鈴鹿市文化財だより 1』
- 18) 大場範久・仲見秀雄 (1972) 「鈴鹿市深溝町狐塚古墳調査報告」『神戸史談』第 8 号(神戸高等学校郷土史クラブ)

第1表 出土遺物一覧

1. 弥生時代の土器 (第5～7図)

器種	No.	法量 cm			形態の特徴	調整・紋様他	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
壺	1	(16.8)	-	-	垂下口縁, 口縁端部肥厚角張る	口縁内面クシ刺突羽状紋, 外面クシ波状紋	砂礫含む	良	赤褐色	口縁 1/7 残
	2	33.4	-	-	垂下口縁, 口縁端部尖りぎみ	頸部外面縦ハケ口縁端面にクシ直線紋	砂礫多し	不良		口縁 3/4 残
	3	12.8	(5.6)	19.3	胴部潰れた球形口縁部わずかに内湾	胴部内面上半横ハケ	良	良	黄褐色	胴 1/2 底 3/4 欠
	4	-	-	-	丸い胴部	胴内面横ハケ, 外面縦ヘラミガキ, 頸部以上内外面ヨコナデ	並		赤褐色	口縁端部胴下半欠
	5	(11.4)	(9.6)	21.0	脚台付, 口縁わずかに内湾, 脚外反ぎみに開く	胴外面縦ヘラミガキ, 胴と脚のつぎめ付近ハケメ, 脚上方にクシ直線紋2帯	砂粒含む		黄褐色	口縁 および脚 1/2 残
甕	6	-	-	-	頸部軽くくの字状に屈曲	外面縦ハケ, 内面および端面横ハケ, 口縁端部にハケ刺突紋	砂礫含む	並	暗黄褐色	口縁 一部残
	7	(14.4)	-	-	頸部くの字状に強く屈曲	胴内外ハケ目	砂礫多し		赤み黄褐色	口縁 1/5 残
	8	(19.3)	-	-	頸部直立ぎみに立ち上がり緩やかに外反	胴部外面縦ハケ内面横ハケ, 口縁部内ヨコナデ	並	良	黄褐色	口縁 1/4 残
	9	(16.0)	-	-	口縁端部角張り面をもつ	胴部内外面ハケ	砂粒多し	並	赤み黄褐色	口縁 1/2 残
	10	(15.0)	-	-	胴部膨らまず口縁端部角張り面をもつ			不良	赤み黄褐色	口縁 1/3 残
	11	(16.2)	-	-	受口口縁, 口縁内傾	口縁にクシ連続刺突紋と羽状紋	並	良	淡灰黄褐色	口縁 1/8 残
	12	(18.0)	-	-	受口口縁, 口縁短くわずかに内傾	胴部外面縦ないし斜めハケ胴部にクシ連続刺突紋と直線紋口縁にクシ連続刺突紋		不良	暗褐色	口縁 1/4 残
	13	11.5	3.9	12.9	受口口縁, 口縁開きぎみ	胴部外面縦ないし斜めにハケ, 口縁ヨコナデ			黄褐色	口縁 一部欠

器種	No.	法量 cm			形態の特徴	調整・紋様他	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底経	高さ						
高坏	14	12.1	—	—	碗状の坏部, 口縁部わずかにすぼまる	坏部・脚部外面ハケ, 脚部にクシ直線紋2帯と連続刺突紋	並	不	黄褐色	脚部欠
	15	(20.6)	—	—	坏部に稜あり, 口縁部外反	坏部下半斜めハケのち縦ヘラミガキ, 口縁外面クシ波状紋	良	良	黄褐色	口縁1/3残
	16	(20.6)	—	—	坏部の稜明瞭口縁大きく外反	口縁ヨコナデ, 坏部稜付近クシ直線紋, 口縁にクシ波状紋	良	良	灰黄褐色	口縁1/5残
	17	—	—	—	脚部に3方円孔	外面縦ヘラミガキ, 坏部内面斜めないし横ハケ			赤み黄褐色	口縁・裾欠
	18	—	—	—	直立した脚部	外面縦ヘラミガキ, クシ直線紋3帯	砂礫含む	並	赤み黄褐色	脚部一部残
	19	—	—	—	脚部直線的に開く	クシ直線紋5帯	良		赤み黄褐色	坏部・裾欠
器台	20	—	—	—	脚部直線的に開く, 胴底部内面平坦	クシ直線紋4帯連続刺突紋3帯	並	不良	淡黄褐色	一部残
?	21	—	13.8	—		4方に円孔, 貼付突帯紋飾る	砂礫多し	不良	赤み黄褐色	脚部のみ残
壺	22	—	最大径12.0	—	半球形の胴部	胴部外面に貼付突帯紋4本、連続刺突紋3帯、最下部にクシ	良	やや不良	赤み黄褐色	台付壺? 胴部のみ3/5残
	23	—	(11.6)	—	脚部外反, 端部は丸みを帯びた方形, 端部中央は凹線様に窪む3方向に円孔	外面縦ヘラミガキ, 端部ヨコナデ, 内面横ないし斜めにハケ	砂礫含む	良	赤褐色	台付壺? 胴部のみ3/4残
甕	24	—	(5.9)	—	直線的な脚部, 明瞭な端面	胴内外面ハケ, 脚内外面ヨコナデ	砂礫多し	良	赤褐色	脚部1/4残
鉢	25	(18.4)	2.5	16.9	底部に焼成前穿孔, 肥厚した口縁部の立ち上がり短い, 端部わずかに角張る	胴部外面上半斜め, 下半縦ハケ口縁ヨコナデ	並	不良	淡黄褐色	甗? 口縁1/10残
高坏	26	(10.0)	—	—	碗状の坏部, 口縁端部すぼまり胴部下方にて丸く膨らむ	外面縦ヘラミガキ, 内面斜めハケ, 口縁ヨコハケ		並	並	赤み黄褐色
	27	—	(10.0)	—	碗状の坏部, 脚中程にて屈曲	脚外面下半縦ハケ, 上半から坏部にかけて縦ヘラミガキ	良	不良	淡黄褐色	脚1/6残

器種	No.	法量 cm			形態の特徴	調整・紋様他	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
高坏	28	—	8.1	—	碗状の坏部，脚中程より下にてわずかに屈曲3方に円孔もつ	脚外面縦ハケ	砂粒含む	並	赤み黄褐色	脚 1/2 残
	29	—	—	—	碗状の坏部，脚はゆるやかに外反，円孔をもつ	クシ直線紋3帯の間に連続刺突紋	並	不良	淡黄褐色	坏部・脚部端欠
	30	—	—	—	碗状の坏部？	脚外面縦ヘラミガキののち連続刺突紋を施し紋様の間をヨコナデ，坏部内面ハケ，3方円孔	砂粒含む	良	赤褐色	坏部・脚部端欠
	31	(22.7)	—	—	盤状の坏部，口縁外反，口縁端丸みを帯びる	外面縦ヘラミガキ	並	良	暗黄褐色	坏部のみわずかに残
	32	—	(15.6)	—	盤状の坏部？脚は直線的に開き下位にて屈曲し大きく外反	外面縦に内面は横にハケ3方に円孔をもつ		不良	黄褐色	脚 1/4 残

2. 弥生時代の石器 (第8図)

器種	No.	法量 cm			形態の特徴	調整・紋様他	石質	備考
		長さ	幅	厚さ				
石斧	33	(10.65)	6.8	(2.25)	片刃, 刃部ほぼ直線的	基部欠損ののち調整?	砂岩	器部欠損, 加工石斧?

3. 土師器 (第12図)

器種	No.	法量 cm			形態の特徴	調整・紋様他	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
高坏	1	7.7	7.5	9.5	碗状の坏部, 口縁部はややすばまり口縁部は外反し尖りぎみ, 内傾する端面をもつ, 脚部は内湾し, 端部に到って大きく屈曲ぎみに外反する	坏部・脚部外面ヘラケズリ, 口縁部・脚端部ヨコナデ, 坏部内面ヘラ状工具による調整	良砂礫少量含む	並	赤黄褐色	底 1/2 欠
	2	7.3	7.4	9.7					一部欠	
	3	6.6	7.4	9.9					口縁・底部ほぼ完	
	4	7.0	7.2	10.1					ほぼ完	
	5	8.3	(7.8)	10.2					口縁ほぼ完, 底一部残	
	6	7.3	(7.3)	10.4					口縁 2/3 底 1/2 残	
	7	(7.9)	(7.9)	10.9					口縁 1/2 底 1/2 残	
	8	—	—	—	朝顔形の坏部, 口縁部は一旦外反し, 端部はつまみ上げられ, やや受口状を呈する, 脚部に至って大きく屈曲ぎみに外反する	坏・脚部外面ヘラケズリ, 口縁・脚端部ヨコナデ	砂礫含む	並	赤みをおびた黄褐色	口縁・脚端部欠
	9	—	7.9	—					口縁・脚 3/4 欠	
	10	13.0	8.3	9.7					ほぼ完	
	11	(13.7)	(8.0)	9.9					口縁一部脚 1/5 残	
	12	(12.9)	7.8	10.2					口縁 2/3 残, 脚一部欠	
	13	(13.9)	7.8	10.4					口縁 3/4 欠	
	14	15.0	7.6	10.7					口縁 2/3 残, 脚ほぼ完	
	15	13.8	8.6	10.3					口縁・脚 1/2 残	

器種	No.	法量 cm			形態の特徴	調整・紋様他	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
壺	16	(9.2)	最大径 12.7	15.8	筒状の頸部、つぶれた球状の胴部をもつ、口縁端部はかるく外反したのち、つまみ上げられ、受口状を呈する	頸部外面ヘラミガキ、胴部外面横ヘラケズリ頸部・胴部のつなぎめ及び口縁ヨコナデ	砂礫少量	不良	赤みを帯び黄褐色	口縁1/4残、底一部欠
罍	17	10.3	—	5.4	口縁端部小さく内湾	胴外面不定方向のハケ、口縁ヨコナデ	並	不良	黄褐色	ほぼ完、風化著しい
	18	11.1	—	7.7	口縁部にてわずかにすぼまり、端部は外反する					

4. 須恵器 (第13・17図)

器種	No.	法量 cm			形態の特徴	調整・紋様他	胎土	焼成	色調	ロケロ	備考
		口径	底径	高さ							
坏蓋	19	13.3	—	4.3	天井と口縁の間に稜あり、口縁端部に面あり	天井部外面3/4ヘラケズリ	砂礫多し	不良	暗灰淡・灰色	左	一部欠
	20	14.0	—	4.4	丸い天井、口縁端部に面あり	天井部外面ヘラケズリ	砂粒含む	良	暗青灰色		右
	21	14.4	—	4.2	天井に小さな平坦部	天井部外面ヘラケズリ、天井部内面ナデ					
	22	15.0	—	3.5	天井中央くぼむ						
	23	13.7	—	4.8	丸い天井		砂礫含む			左	ほぼ完
	24	(14.2)	—	—			砂粒含む				
坏身	25	11.4	受部径 13.3	3.4	口縁端部に面をもつ	底部外面3/4ヘラケズリ	砂礫含む	良	暗青灰色	左	一部欠
	26	11.9	受部径 13.8	4.5		底部外面2/3ヘラケズリ	並	不良	淡灰色		完
	27	11.4	受部径 13.4	3.7		底部内面指オサエ・ナデ、底部外面ヘラケズリのち指オサエ	砂粒含む	不良	淡青灰色		一部欠
	28	12.7	受部径 14.8	4.0		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ		良	暗灰色	右	完
	29	12.5	受部径 15.1	4.1				並	淡灰色		ほぼ完
	30	(12.2)	受部径 (14.4)	4.4	口縁直立ぎみ	底部外面ヘラケズリ、内面ナデ指オサエ	砂粒多し	良 釉着あり	灰色		口縁1/3残外面自然釉
	31	12.6	受部径 14.5	4.4		底部外面ヘラケズリ	砂粒含む	不良	淡青灰色	左	一部欠

器種	No.	法量 cm			形態の特徴	調整・紋様他	胎土	焼成	色調	ロク ロ	備考
		口径	底径	高さ							
坏身	32	(12.8)	受部径 (14.8)	—		底部外面ヘラケズリ	並	不良	淡青 灰色		口 縁 1/4 残
	33	11.7	受部径 14.2	4.0	底に小さな平坦部をもつ逆台形、内傾口縁	底部外面一定方向に調整ののち雑な回転ヘラケズリ	砂礫含む	良	暗青 灰色	右	一部欠
高環	34	11.8	10.9	14.8	無蓋高環、長脚2段3方透かし、長方+三角口縁端に段	環底部外面ヘラケズリ、坏部内面に木の葉形のヘラ記号	並	良	灰		ほぼ完
壺	35	8.3	最大径 13.1	13.8	底部に小さな平坦部、口縁部に段をもつ	口頸部カキ目、胴部肩に2条の沈線、胴部下から1/4ヘラケズリ、底部にヘラ記号	砂粒含む	良	色	右	ほぼ完 外面自然釉
	36	6.0	最大径 11.5	13.0	いびつな底部、口頸部中程に段あり、口縁部やや内湾	底部不定方向ナデ、オサエ、口頸部にヘラ記号	砂礫含む	焼き ぶくれ	暗青 灰色		完
埴	42	—	—	—	胴部よりはるかに大きい口縁部、口縁受口状球状胴部の上半に最大径	胴部中程以下ヘラケズリ、胴部・頸部に沈線と列点紋	砂粒含む	良	暗灰 色	右	口 縁 欠 損
提瓶	43	7.3	—	—	環状把手焼成前欠損、やや受口状の口縁	部回転ヘラケズリ、平行タタキ	砂粒含む	並	暗灰 色	左	一部 欠 損
坏身	44	11.8	受部径 14.6	3.6		底部ヘラ切り未調整底部内面ナデ	砂礫含む	不良	青色 淡灰		完

5. 鉄器 (第 14 図)

器種	No.	法量 cm			形 態	備 考
		長さ	幅	厚さ		
鍬	37	(6.0)	2.5	0.6	尖根	基部欠損
	38	(15.1)	1.0	0.5	尖根、断面方形の長いのかつぎ	
刀子	39	(13.1)	1.5	0.7		一部欠損
	40	13.9	(1.6)	0.9		
?	41	(4.0)	0.4	0.3		一部欠損

写 真 图 版

写真図版 1



調査前全景



表土除去後全景



作業風景 (1)



作業風景 (2)



主体部



土層断面 A - B



土層断面 C - D

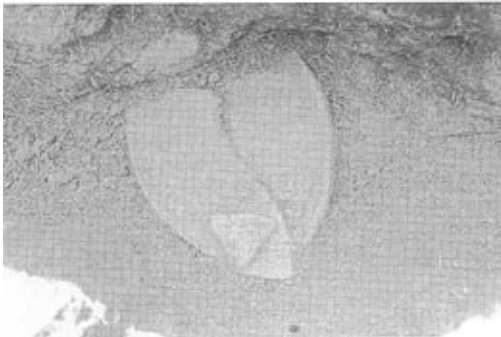
写真図版 2



調査後全景



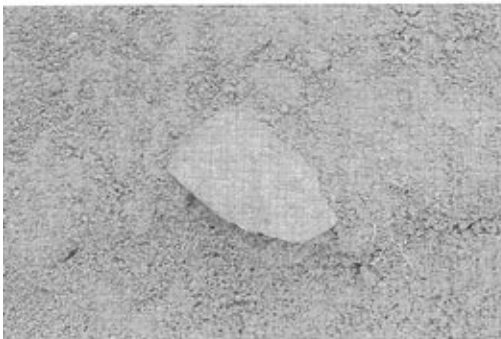
遺物出土状況 (1) → 第 7 図 22



遺物出土状況 (2) → 第 5 図 2



遺物出土状況 (3) 第 5 図 5



遺物出土状況 (4) → 第 8 図 33



遺物出土状況 (5)



遺物出土状況 (6) → 第 13 図 34



遺物出土状況 (7) 第 12 図 17・18
第 13 図 35・36

写真図版 3



2



3



4



5



7



8



9



10



12



13



14



17



18



19



20



21

南山遺跡出土の遺物 (1) → 第 5 図 ~ 第 6 図

写真図版 4



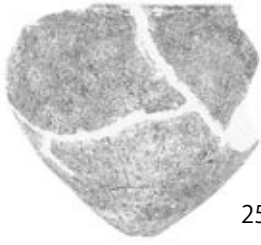
22



23



24



25



26



27



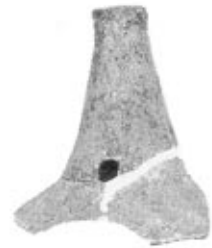
28



29



30



32



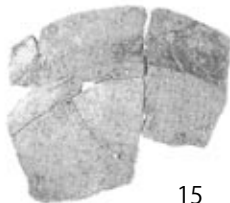
1



6



11



15



31



33

南山遺跡出土の遺物 (2) → 第 5 図 ~ 第 8 図

写真図版 5



1



2



3



4



5



6



7



8



9



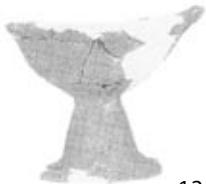
10



11



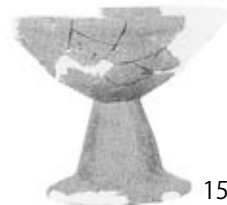
12



13



14



15



16



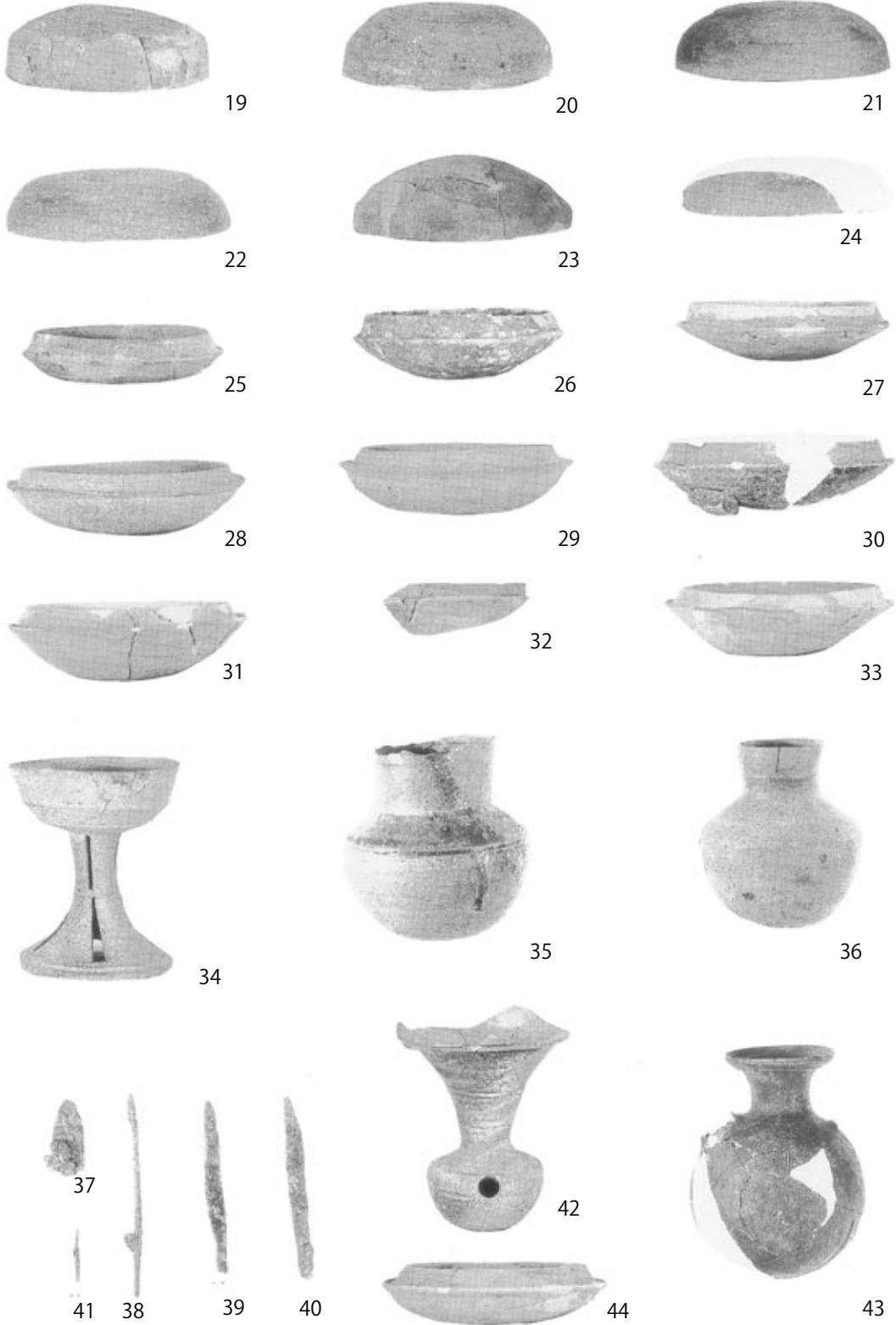
17



18

南山6号墳出土の遺物(1) → 第12図

写真図版 5



南山 6 号墳出土の遺物 (2) → 第 13 図 ~ 第 14 図 ・ 第 17 図

鈴鹿市埋蔵文化財調査報告Ⅸ

南山遺跡・南山6号墳

1991年6月

編集・発行 鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市遺跡調査会

印 刷 株式会社 星光堂
四日市市三ツ屋町 14-15